

靈魂第十号の秘密

海野十三

青空文庫

電波小屋「波動館」

みなさんと同じように、一畑少年も熱心な電波アマチュアだった。

少年は、来年は高校の試験を受けなくてはならないんだが、その準備はそっちのけにして、受信機などの設計と組立と、そして受信とに熱中している。

彼は、庭のかたすみに、そのための小屋を持っている。その小屋の中に、彼の小工場があり、送受信所があり、図書室があった。もちろん電源も特別にこの小屋にはいついた。この小屋を彼は「波動館」と名づけていた。

このような設備のととのつた無線小屋を、どの電波アマチュアも持つというわけにはいかないだろう。

一畑少年の場合は、お母さんにうんとねだってしまって、このりっぱな「波動館」を作りあげてしまったのだ。

お母さんは、ひとり子の隆夫少年に昔から甘くもあつたが、また隆夫少年ひとりをたよ

りに、さびしく暮して行かねばならない気の毒な婦人でもあった。

というのは、隆夫少年の父親である一畑治明博士は、ヨーロッパの戦乱地でその消し息ようそくをたち、このところ四力年にわたつて行方不明のままであるのだ。あらゆる手はつ

くしたが、治明博士の噂のかけらも、はいらなかつた。もうあきらめた方がいいだろうという親の数がだんだんふえて来た。心細さの中に、隆夫の母親は、隆夫少年ひとりを持たよりにしているのだ。

なお、治明博士は生物学者だつた。日本にはない藻類もろいを採取研究のためにヨーロッパを歩いてうちに、鉄火てつかの雨にうたれてしまったものらしい。

博士の細胞から発生した——というと、へんない方だが——その子、隆夫は、やはり父親に似て、小さいときから自然科学に対して深い興味を持っていた。そしてそれがこの二三年、もっぱら電波に集中しているのだつた。

隆夫は、学校から帰つてくると、あとの時間を出来るだけ多く、この小屋で送った。

夜ふけになつても小屋から出て来ないことがあつた。また、「お母さん、今夜は重要なアマチュア通信がありますから、ぼくは小屋で寝ますよ」などと、手製の電話機にかけてくることもあつた。

この小屋には、同じ組の二宮君にのみやと三木君みきが一番よく遊びに来た。この二人も、そうとうなアマチュアであった。

隆夫の方はほとんどこの小屋から出なかつた。友だちのところを訪れるおとすことも、まれであつた。

そのような一畑少年が、この間から一生けんめいに組立を急いでいる器械があつた。それは彼の考えで設計したセンチメートル電波の送受信装置であつた。

この装置の特長は、雑音がほとんど完全にとれる結果、受信の明瞭度めいりょうどがひじょうに改善され、その結果感度が一千倍ないし三千倍良くなつたように感ずるはずのものであつた。

その外にも特長があつたが、ここではいちいち述のべないことにする。

その受信機は組立てられると、小屋の中にある金網かなあみで仕切つた。奥の方に据すえられたあらい金網が、天井から床まで張りつぱなしになっているのだ。その横の方が、戸のようにあく、そこから中へはいれる。その仕切りの中の奥に台がある。その上に例の受信機は据えられた。送信機の方は、もつとあとにならないと組上あがらない。

パネルは、金網の上に取り付けてあつた。受信機とパネルの間には、長い軸しくが渡されてあつた。金網の外で、パネルの上の目盛盤めもりばんをまわすと、その長い軸がまわつて、受信機の

可動部品を動かすのである。

金網はもちろんよく接地^{せつち}してある。だからパネルの前に人間が近づいて、目盛盤をまわしても、受信回路の同調を破つたり、ストレー・フィールドを作つて増幅回路へ妨害を与えたりすることはない。この金網は、じつは天井も床も四方の壁をも取り囲んでいて、つまり受信機は大きな金網の箱の中に据えられているわけだ。これほど念を入れてやらないと、波長がわずかに何センチメートルというような短い電波を、純粹にあつかうことはできないのだ。

隆夫は、自分の受信機が、非常にすぐれていると信じていた。これが働きだしたら、ひよつとすると火星などから発信されている電波を受けることもできるのではないかとさえ考えていた。

もちろん彼は、火星だけをあてにしているわけではなかった。最近の観測によると、火星には植物でもずっと下等な地衣類^すがはえているだけで、動物はまずいないのであろうといわれる。つまり火星人なんて棲^すんでいないらしいというのだ。

しかし宇宙は広大である。直径十億光年の大宇宙の中には、地球と似た遊星^{ゆうせい}も相当たくさんあるにちがいないし、従つてその住民がやはり電波通信を行っているだろうし、そ

うだとすればその通信をとらえる可能性はあるはずだと考えていた。

そしてあと二十年もすれば、われわれ人類はいよいよ宇宙旅行に手をつけるだろうが、それにはロケットをとばすよりも先に、電波をとばし、また相手から発射される電波信号をさぐるの方が先にしなくてはならない仕事だと思っていた。

そういう意味において、隆夫は、こんど組立てた受信機に大きな望みと期待とを抱いていた。

初めての実験

すっかり組立を終った。

隆夫は胸をおどらせて、金網の箱の外のパネルの前に、腰掛を寄せて、いよいよその受信機を働かせてみることになった。

電源を入れた。

しばらくすると、真空管のヒラメントがうす赤く光りだした。

そこで五つの目盛盤をあやつると、天井から下向きにとりつけてある高声器から、がらがらツと雑音^{ざつおん}が出て来た。

「おやツ。雑音は出て来ないはずだが、なぜ出て来るんだろう」

雑音を完全に消すのが特長であるこの受信機が、スイッチを入れるが早いか、がらがらツとにぎやかに雑音を出したものだから、隆夫はすっかりくさってしまった。

「どこが悪いんだろうか」

電気を切ると、隆夫は金網戸を開いて、器械のそばへ行った。

せつかくつないだ接続をはずして、装置の各パートを、たんねんに診察しはじめた。それが終わったのが、朝の三時だった。結果は、どのパートも故障はなかった。

それからまた電源や出力側の接続をやり直した。それが完了すると、金網戸のところを外へ出、ぴつたりと戸をしめた。そしてパネルの前に再び腰を下ろし、もう一度頭の中で手落ちはないかと確か^{たしか}め、それから金網越しに、奥の台の上に列立する真空管や、鋭敏^{えいびん}な同調回路の部品や、念入りに遮蔽^{しゃへい}してあるキャプタイヤコードの匂^はいまわり方へいちいち目をそそいだ。

「こんどこそ欠点なしだ」

確信をもって彼は、電源のスイッチを入れた。そしてしばらく真空管の温まるのを待った。

がらがらッ。がらがらッ。

雑音が、てんじょううら 天井裏の高声器から降ってきた。

しぶい顔をして隆夫は、又してもはねまわるぬ雑音に聞き入った。

「だめだッ」

スイッチを切る。

「いったいどこがいけないのか、見当がつかないや。どこも悪くないんだがなあ」
 がっかりして、彼はとなりの図書室の長椅子ながいすの上へのびて、ねてしまった。

その翌日のことであつた。

学校のかえりに、にのみや 二宮とみき 三木がついて来た。

隆夫は二人を小屋の中の金網の前につれこんだ。そして前夜からのことをくわしく説明した。

「ちよつとスイッチを入れてみないか」

二宮がいったので、「よし」と隆夫は電源スイッチを入れた。

すると間もなく、例のがらがらツ、が始まった。だが昨夜ほど大きくはなかった。とはいうものの、他のよわい通信を聞き分けることは、とてもできないくらい雑音の強さは桁けたはずれに大きかった。

二宮も三木も、かわるがわるパネルの前に立って、隆夫にききながら目盛盤をまわしていろいろ調整をやってみたが、さっぱり通信の電波は受からなかった。

ただ二宮は、こんなことをいった。

「この雑音ね、どの波長のところでも聞えることは聞えるけれど、この目盛盤で5から10ぐらいの間が強く聞えて、その両側ではすこし低くなるね」

「それはそうだね。その5と10の外では、急に回路のインピーダンスがふえるから、それで雑音も弱くなるのじゃないかなあ」

隆夫が意見をのべた。

「そうだろうか。しかしぼくはね、この雑音はふつうの雑音ではないような気がする。やっぱり信号電波が出ているんじゃないかなあ。しかしその電波は、鋭敏に一つの波長だけで出していないんだ。そうとう広い波長帯で、信号を放送しているんじゃないかなあ」

二宮は、かわった見方をしている。

「でもこれは雑音のようだぜ」

「ぼくもそう思う」

三木も隆夫に賛成した。

両説に分れたままで、その時は分れた。なぜならば、三人の少年たちの知識と実力でそれは解決することができなかつたからだ。

友だち二人が帰ると、隆夫は小屋の中にひとりとなつたが、気が落ちつかなかつた。もう一度雑音を聞いてみた。雑音にちがいないと思いつながら、妙に二宮のいった広い波長帯をもつた放送かもしれないという説が気になつてならなかつた。そこで彼は決心して、小屋から出ていった。母親にこわつて、隆夫は外出した。彼が足を向けたのは、電波物理研究所で研究員をしている甲野博士こうのはかせのところだつた。若い甲野博士は、電波の研究が専門で、隆夫がアマチュアになつたのも、この人のため、隆夫の家とは遠い親戚しんせきにあたるのだつた。

博士の批判

甲野博士にねだつたかいかあつて、博士はその日研究所の帰り路かえみちに、隆夫の家へ寄つてくれることになつた。

もう退ひけ時どきに近かつたので、隆夫はしばらく待つてから、博士と連つれ立だつて、わが家へ向つた。

門を開いて、庭づたいに小屋の方へ歩いて行くと、お座敷のガラス戸ががらりとあいて母親が顔を出した。

甲野博士へのあいさつもそこそこにして、

「ねえ、隆夫。たいへんなことができたよ」

と、青い顔をしていった。

「どうしたの、お母さん」

「お前の研究室がたいへんなんだよ。さつきひどい物音がしたから、なんだろうと思つていつてのぞいてみるとね……」

母親は、あとのことばをいいかねた。

「どうしたんですか。早くいつて下さい」

「中がめちやめちやになつてゐるんだよ。なんでもご近所のドラ猫がとびこんだらしいんだがね、金網かなあみの中であばれて、たいへんなことになつてゐるよ」

「えつ、金網の中？ それはたいへん」

隆夫は夢中で小屋の方へ走つた。甲野博士もあとから、隆夫の母親と連れだつて小屋の方へゆつくり歩む。

まったく小屋の中はたいへんなことになつてゐた。もつともそれは金網の箱室の中だけのことであつたが、隆夫が一生けんめいに組立てた受信機がめちやめちやにぶちこわされてゐた。大切な真空管も、大部分はこわれてゐた。ドラ猫は中にいなかった。金網の戸がすこしあいてゐた。

「しまった」と隆夫は思った、よく閉めておかなかつたのが悪かつたのだ。なさけなさに、涙も出ず、隆夫は金網の戸をあけて中へはいつたが、すみっこに鼠ねずみのしつぽが落ちてゐるのを見つけた。

「ははあ。するとこの中に鼠が巣をつくつてゐたのかもしれない。そのために、あの雑音

が起つたのであろう」

問題が解けたように思った。

そこへ博士と母親とがはいつて来た。

隆夫は、甲野さんにすべてを説明した。猫にあばれこまれたらしい話までした。

博士は、ちよつと考えていたが、

「さあ、鼠が巢をつくつていたのが雑音の原因かどうか、それはそうと考えられないこと
もないけれど、実際に装置を働かして聴いてみた上でないと、何ともいえないね」

と、学者らしい慎重さでいった。

「困つたなあ。こんなにかわされたんでは、もう一度こしらえ直すことが出来るかどうか
……」

「まあ、そうがっかりしないで、元気を出して、またつくってみるんだね。およそ研究と
いうものは、辛棒しんぼうくらべみたいなものだ。忍耐力がないと成功はおぼつかない。……と
にかく、装置の再建ができれば、また来て、見てあげよう。しかし君は、なかなかむずか
しいことに手を染めたようだね。どれ、接続図と設計図とがあるなら出してごらん」

博士は凶面を見て、いろいろとためになることを隆夫に注意した。が、最後にいった。

「……とにかく、とにかく、君は誰もやったことのない方法で受信をしようとしている。それだけに面白い。しかしはたして君に扱いきれるかどうか、疑問だね。そしてもしも異様な雑音よが出たなら、それを録音しておくといひね。録音しておけば、あとでゆっくり分析も出来る。ぼくがやってあげてもいい。まあ力をおとさないように」

そういつて甲野博士は、小屋を出た。

隆夫は、その夜はへたばつて、早く寝てしまった。

翌日になると、隆夫は元気をもりかえした。ちょうど日曜だったので、彼は朝から「波動館」の中へはいり切りだった。

二宮君と三木君もやって来たので、三人して、猫と鼠の格闘かくとうでめちやめちやになった装置の復旧ふっきゆうを手つだつた。この仕事は、一日では終らなかつた。あと四五日はかかるであろうと思われた。

友だちが帰ってしまったあと、隆夫はひとりで金網室の中にぼんやりとしていた。が、彼は急に、電波のみだれ飛ぶ世界を耳でうかがつてみたくて、たまらなくなつた。

そこで大急ぎで、残つた部品を仮かりの接続でつなぎあわせ、金網の外へ出て、パネルについている電源スイッチをおそろおそろ入れてみた。

受信波長の調整もしてないから、どのあたりの電波に同調するか分らない。いやそれよりも、果して装置が働くかどうか疑問であつた。

真空管は、とぼつた。さあ次は雑音が出る番だ——と思つた。ところが、とつぜん天井の高声器から人の声がとび出した。ただの声でない。呻くうめような、呪のろっているような、男とも女とも分らない、いやな声であつた。

いったい何者なのか。電波怪異でんぱかいいはこのときに始まる。

雑音ざつおんの推理

まさしく、高声器から、音声がでていたのでつた。それは、何をいつているのか、意味が分らなかつたが、とにかくそれが音声であることは了解された。

怪音だ。いや怪音声だ。

隆夫は、うれしくて、ダイヤルをいろいろとひねくりながら、その怪音に聞きほれた。

怪音が彼の気にいったのではなく、彼が長い間かかって組立てた極超短波受信機ごくちょうたんぱじゆしんきが始めて働いてくれたことがうれしかったのだ。

「すごい。すごい。たしかに働いている」

彼は、にこにこ顔でひとりごとをいったが、そのうちに気がついたことは、このような一時的の配線では、どこかの電波を受信できながら、前に本格的にきちんと配線したときには、なぜ働いてくれなかつたかということである。

「はじめの本格的配線のときには、いくども調べたんだから、配線にまちがいはないはずだ。どうもおかしいねえ」

わけが分らない。あとで、一時的配線をよく調べてみよう。それは本格的配線と同じにやったつもりだが、あるいはどこかに違った配線をしているのかもしれない。早くそれを調べたいが、今はそのひまがない。なにしろ電波が今、現げんに、この受信機にキヤツチされている最中なんだから……。

「はて、これは何を喋しゃべっているのかな」

隆夫は、第三段目になって、ようやく高声器から今出ている高声が、怪音というべき種類のものであることに注意をそそぐようになった。

「なにかいつている。調子が日本語のようだが、どうもよく分らない。ああ、そうか。音がゆがんでいる上に、雑音もかなり交まじっているんだ。まず雑音をとってみよう」

この雑音は、電波それ自身ましに交まじっている雑音であった。その雑音を除はずくうまい方法を隆夫は知っていたから、早速さつそくその装置を持つて来て、取付けた。

すると、受信音は急にきれいになった。耳ざわりな雑音が除かれたためである。

だが、あとに残った音声は、やはりアーティキュレーションがよくなかった。不明瞭ふめいりょうなのであった。

音声のゆがみは、直す方法がない。

もしありとすれば、それは受信機を構成している部品の特性の悪さや真空管のまずい使い方によるのであるが、そういう点については、隆夫は今までによく吟味ぎんみしてあったから自分のところの受信機はほとんどゆがみを生しょうじない自信があった。

だからこの音声のゆがみは、その電波が受信機にはいる前に既に持っているゆがみなのだ。

隆夫はここまで推理を進めていって、ふうーッと溜息をついた。推理は、やっと半道はんみち来たばかりだ。その先が、難物なんぶつだ。とても手におえそうもない。

が、勇敢にぶつかろう。

音声ゆがみが、電波自体の中に既に含まれているものとすれば、それはどうしたわけかゆがみを生じたものであろうか。

送信装置がよくないために、そこにゆがみを生ずる原因があると考ええる。これはめずらしくないことだ。拙劣な変調装置を使うとか、マイクロホンがよくないとか、増幅装置がうまくいところで働いてないとか、そういう素因によって音声はゆがめられる。

だが、権威ある送信局から出るものは、そんな劣悪なゆがみを持っていないと断定していいだろう。素人の作った送信機だとか、何かの理由で、故障あるいは不調の送信機をやむを得ず使わなくてはならない場合だとか、あるいはまた、この通信に対して他からの露骨な妨害が加えられた場合には、ゆがみが起るであろう。

ゆがみの原因は、その他にもあろうが、だいたい今かぞえたのが普通考えられる場合である。

いや、まだ有った。それは、その音声を発する者自体が、そんなゆがんだ音声しか出せない場合である。たとえば、酒に酔っぱらって、口がまわらなくなった人間が、マイクの前に立ったとすると、ゆがんだ音声が入る。百歳に近い老人が死床にいて、苦

しい息の下から遺言ゆいごんをするような場合も、音声は相当ゆがんでいるであろう。

そんな場合でなくとも、生れつき発音が不明ふめいせき晰な人がある。そういう人がマイクの前に立てば、ゆがんだ音が送り出される。生れつきでなくとも、たとえば日本語を習いはじめたばかりの外国人から聞く日本語の発音のように、発音の不正確から来る音声のゆがみが考えられる。

「まず、ゆがみの原因について考えられることは、そのくらいであろう」

隆夫は、可能な場合をほとんど残らず数えあげたと思つて、ほつと吐息といきした。あとは、今の場合、ゆがみがどの原因によつて起つてゐるかを突き止めることだ。

しばらく隆夫は、天井にとりつけた高声器から聞えてくるくしゃくしゃいう受信音に耳を傾けた。

「なんとといういやな声だろう。何といつてゐるのか、ちつとも分りやしない。うむ待てよ。これは参考のために録音しておこうや」

隆夫は大急ぎで腰掛からとびあがった。そして録音機をとり、となりの部屋へいった。

苦しい会話

録音が行われた。

約五分間にわたって、録音された。

隆夫は、その録音した受信機をもとにして不明瞭な^{ふめいりよう}音声をなんとか分析して、その言葉の意味を読みとるつもりだった。

それには少々装置の用意がある。二三日はかかるであろう。

隆夫は急に疲労をおぼえた。さつきから緊張のしつづけであったためであろう。となりの寢室へ行って、しばらく睡ることにした。あいかわらず高声器からは、わけのわからない言葉がひきつづき出ていた。隆夫は、受信機のスイッチを切ろうと手を出したが、そのとき気がかわって、スイッチは切らないでそのままにしておくことにした。

隆夫は、軽便寢台^{けいべんしんだい}の上に毛布にくるまって、ぐっすり睡った。

ふと眼がさめた。

が、まだ睡くてたまらない。ぴったりくっついた^{まぶた}眼をむりやりにあけて、夜光の腕時計

を見た。

午前三時だった。すると、あれから一時間半くらい睡ったわけだ。まだ猛烈に睡い。

その睡いなかに、隆夫はふとぼそぼそと話し合っている人声を聞きとがめた。それは近くで話している。

「……さあ、君はそういうが、万一失敗したときには、どうするんだね」

「失敗したときは、失敗したことですわ。たとえ失敗しても、今のようなおもしろくない境きようぐう遇ぐうにくらべて、この上大した苦痛が加わるわけでもありませんものね」

女の声であった。

男と女の話声だった。ゆっくりゆっくり、ぼそぼそと語り合っている。声は若いが、その語る調子は、ふけた老人のように低い空虚なものであった。

隆夫はだんだん目がさめて来た。

「……そういう冒険は、よした方がいいと思うね。君は、僕がひっこみ思案だと軽蔑けいべつするだろう。しかしね、僕は今までに君のような冒険を試みて、それに失敗して、ひどい目に会った連中のことをたくさん知っているのだ。彼らは、失敗してこっちへ戻ってくるともうすっかり気きり力よくがなくなつてね、そのうえにあの世界あでいろいろな邪悪あくに染そまつて、

それを洗いおとすために、それはそれはひどい苦しみをくりかえすのだ。僕はとても長くはそれを見守っていられなかった……」

「もう、たくさんよ、そのお話は。そのようなことは、あたくしも知っていますし、そしていくども考えても見ましたの。その結果、あたくしの心は決ったんです。どうしても、行つて見たい。肉体を自分のものになりたい。二度以上はともかくも、一度はぜひそうなつてみたい。あなたがあたくしのために親切にながながといつて下さったのはうれしいのですけれど、あたくしは、今日の前に流れて来ている絶好の機会をつかまないでいられないのです」

「ああ、それがあぶないんだ。僕は何十ペンでも何百ペンでも、君をひきとめる」

「どういったら、あなたはあたくしの気持ちを分つて下さるでしょうか。じれったいわ」

「僕はどうあつても——」

「あ、ちよつと黙つて……あ、そうだ。ええ、行きますとも。あたくしも。誰がこの絶好の機会をのがすものですか」

「お待ちなさい。あなたは、だまされているんだ。苦しみだけが待っている世界へ、あなたはなぜ行くのですか。……ああ、とうとう行つてしまった」

男の声は、氣の毒なほど絶望のひびきを持っていた。女の声は、それからあと、いくら待っても聞かれなかった。いや、男の声も、それつ切りで終わった。

隆夫は、今の会話の途中から、二人の会話がとなりの実験室の天井にとりつけてある高声器から出てくるものであることに気がついていった。

なぜか理由はわからないが、さつきはあれほど不明瞭ふめいりようだった音声おんせいが、目のさめたときから急に明瞭めいりょうになったらしい。またその音声もずっと大きくなった。大きく、明瞭な話し声かたしになったので、自分は目がさめたんだなどと、隆夫は気がついた。

念のために彼は、寝台から下りて、となりの実験室へ行ってみた。

天井の高声器は、ちゃんと働いていた。もちろん音声は出ていないが、小さくがりがりと音がしていて、働いているのが知れた。

「ふしぎだ。ふしぎな会話だ。いったいどこの誰と誰との会話なんだろうか。まさか、あれが放送のドラマの一部だとは思われない。放送なら、あのあとにアナウンスがあるはずだし、あんな場面なら伴奏ばんそうがなくてはならないはず」

この疑問は、すぐには解けなかった。

やがて夜明けが来た。

そして朝の行事がいつものように始まった。食事をしてから、隆夫は学校へいった。

二宮孝作にのみやこうさくや四方勇治よつかたゆうじがそばへやって来たので、隆夫はさっそく昨夜奇妙な受信をしたことを話して聞かせたら、二人とも「ヘーツ、そうかね」とびつくりしていた。

「三木みきはどうしたんだ。今日は姿が見えないね」

三木にこの話をしてやったら一番よろこぶだろうに。

「三木か。三木は今日学校を休むと、ぼくのところへ今朝電話をかけて来たよ」

と、二宮がいった。

「ああ、そうか。また風邪をひいたのか」

「そうじゃない。病人が出来たといっていた」

「うちに病人？ 誰が病気になったんだろう。彼が休むというからには、相当重い病気なんだろうね」

「ぼくも聞いてみたんだ。するとね、あまり外へ喋しゃべってくれろなどことわって、ちよつと話しがね、彼の姉さんのお名津なつちゃんがね、とつぜん気が変になったので、困っているんだそうな」

「へえーッ、あのお名津ちゃんがね」

「午前三時過ぎからさわいでいるんだって」

「午前三時過ぎだって」

隆夫はそれを聞くと、どきんとした。

脳波収録のうはしゅうろく

なぜ隆夫は、どきんとしたか。

そのわけは、それを聞いたとき、彼が知っている三木の姉名津子の声なつこが、昨日の深夜、
 図らずも自分の実験小屋で耳にした女の声によく似ていることに気がついたからであった。
 実は昨夜もあの声を聞いたとき、どうも聞きおぼえのある声だとは思ったが、それが名津
 子の声に似ているとまで決定的に思出すことができなかつたのだ。

(ふーん。これは重大問題だぞ)

隆夫は、腹の中で、緊張した。

しかし彼は、このことを三木たちに語るのをさし控えた。それは万一ちがっていたら、かえって人さわがせになるし、殊ことに病人を出して家中が混乱しているところへ、新しい困こ惑わくを加えるのはどうかと思つたのである。

そのかわり、彼はこれを宿題として、自分ひとりで解いてみる決心をした。そして、いよいよ確実にそうと決つたら、頃ころあひ合を見はからつて三木に話してやろうと思つた。

「どうして。君は急に黙つてしまつたね」

二宮が、隆夫にいつた。隆夫は苦笑した。

「うん。ちよつと、或ることを考えていたのでね」

「何を考えこんでいたんだい」

「気が変になつた人を治療する方法は、これまでに医学者によつて、いろいろと考え出された。しかしだ、実際にこの病気は、あまりなおりにくい。それから、今までとは違つた治療法を考えだす必要があると思ふんだ。そうだろう」

「それはわかり切つたことだ」

誰もみな隆夫のいうことに異議はなかつた。

「そこでぼくは考えたんだが、そういうときに、病人の脳から出る電波をキャッチしてみ

るんだ。そしてあとで、その脳波を分析するんだ。それと、常人の脳波と比較してみれば、一層なにかはつきり分るのではないかと思う。この考えは、どうだ」

「それはおもしろい。きつと成功するよ」

「いや、ちよつと待った。脳波なんて、本当に存在するものかしらん。かりに存在するものとしてもだ、それをキャッチできるだろうか。どうしてキャッチする。脳波の波長はどの位なんだ」

四方勇治よつかたゆうじが、猛然と新しい疑問をもちだした。

「脳波が存在するかどうか、本当のことは、ぼくは知らない。しかし脳波の話は、この頃よくとび出してくるじゃないか。でね、脳波はいかなる理論の上に立脚りつきやくして存在するか、そんなことは今ぼくたちには直接必要のない問題だ。それよりも、とにかく短い微弱びじやな電波を受信できる機械を三木君の姉さんのそばへ持って行って、録音してみたらどうかと思うんだ。もしその録音に成功したら、新しい治療法ちりようほう発見の手がかりになるよ」

「それはぜひやってくれたまえ、隆夫君」

この話をすると、三木は、はげしい昂奮こうふんの色を見せて、隆夫の腕をとらえた。

「おい、四方君よつかた。君はどう思う」

「脳波の存在が理論によって証明されることの方が、先決問題だと思っね。なんだかわけのわからないものを測定したつて、しようがないじゃないか」

「いや、机の前で考えているより、早く実験をした方が勝ちだよ」と、二宮孝作が四方の説に反対した。

「元来日本人はむずかしい理屈をこねることに溺れすぎている。だから、太平洋戦争のときに、わが国の技術の欠陥をいかななく曝露してしまつたのだ。ああいうよくないやり方は、この際さらりと捨てた方がいい。分らない分らないで一年も二年も机の前で悩むよりは、すぐ実験を一週間でもいいからやつてみることだ。机の前では、思いもつかなかつたようなことが、わずかの実験で、おやおや、こんなこともあつたのか」と分つちまうんだ。頭より手の方を早く働かせた方がいいよ」

「まあ、とにかく、その実験をやることにして、ぼくはその準備にかかるよ。隆夫君、手つだつてくれるね」

三木がそういつたので、万事は決つた。もちろん隆夫は協力を同意したし、二宮も手を貸すといひ、四方までが、ぼくにも手伝わせてくれと申出た。

四人の協力によつて、三日のちに、機械の用意ができた。

その日の午後、一同は三木の家で、仕事を始めた。

名津子なつこの病床には、母親が病人よりもやつれを見せて、看護にあたっていた。まことに気の毒な光景だった。

一同がその部屋にはいったとき、病人はすやすやと睡っていた。なるべく音のしないように、機械を持ちこんだ。

機械は、電波をつかまえるため小さい特殊とくしゆ型がたくうちゆうせん空中線くうちゆうせんと、強力なる二次電子増倍にじでんしぞうばい管かんを使用し、受信増幅装置じゆしんぞうふくそうちと、それから無雑音むざつおんの録音装置とを組合わせてあつた。そして脳から出る電波の収録しゆろくをすると共に、病人の口から出ることばとを同時録音することも出来るようになっていた。

いよいよその仕事が始まった。

病人の目をさまさないうちに、睡眠中病人の脳から出ている電波をとらえることになった。隆夫は受信機の調整にあたり、三木は空中線を姉の頭の近くへ持って行って、いろいろ方向をかえてみる役目を引受けた。あとの二人は録音や整理の仕事にあたる。

深夜の影

「どうだい、何か出るかい」

受信機が働きはじめたとき、三木はすぐそれをたずねた。

「いや出ない」

「だめなのかな」

「そうともいえない、とにかくいろいろやってみた上でないと、断定はできない」

隆夫は、波長帯を切りかえたり、念入りな同調をやったり、増幅段数をかえたりして、いろいろやってみた。

「この機械の受信波長は、どれだけのバンドを持っているのかね」

四方が、隆夫に聞く。

「波長帯は、一等長いところで十センチメートル、一等短いところでは一センチの千分の一あたりだ」

「そうとうな感度を持っているねえ」

「いや、その感度が一様にいつてないので、困っていることもあるんだ」

電波は長波、中波、短波と、だんだん波長が短くなってきた、もつと短くなると超短波となり、その下は極超短波となる。そのへんになると赤外線せきがいせんの性質を帯びて来る。一センチの何千万分の一となると、もう電波であるよりも赤外線だ。そうなる、装置はますますむずかしさを加える。

「なんか出て来たよ。しかしさわがないでくれたまえ」

隆夫が昂奮こうふんをおしつけかねて、奇妙な声を出す。

一同の顔が、さつと紅潮こうちようして、隆夫の顔に集まる。

隆夫は手まねで三木に空中線の向きや距離をかえさせる。そしていそがしくスイッチを切つたり入れたりして、その目は計器の上を走りまわる。

「これらしい。これがそうだろう」

隆夫はひとりごとをいつている。

「ああッ、飛ぶ、飛ぶ、赤い火がとぶ……」

とつぜん、高い女の声。

名津子なつこが口を聞いたのだ。彼女は目がさめたものと見え、むっくりと床から起上ろうと

して、母親におさえられた。

「名津ちゃん。おとなしくしなさい。母さんはここにいますよ」

母親は涙と共に娘をなだめる。

それからの三十分間は電波収録班大苦闘の巻であった。なにしろ目がさめた名津子は、好きなように暴れた。弟の三木も何もあつたものではなく、空中線はいくたびか折られそうになった。母親と三木は、そのたびに汗をかいたし、隆夫たちははらはらしどおしだった。そして予定よりも早く実験を切りあげてしまった。

三木に別れをつけて、残る三人の短波ファンは、そこを引揚げた。

三人は隆夫の実験小屋へ機械をもちこんで、しばらく話し合った。すると、二宮がしかつめらしい顔をして、こんなことをいいだした。

「人間のからだが生きているということはね。からだをこしらえている細胞の間は、放電現象が起つたり、またそれを充電したり、そういう電気的の営みが行われていることなんだとさ。だから三木の姉さんみたいな人を治療するには、感電をさせるのがいいんじゃないかな。つまり電撃作戦だ」

「それは電撃作戦じゃなくて、電撃療法だろう」

「ああ、そうか。とにかく高圧電気を神経系統へぴりつと刺すと、とたんに癒つちまうんじゃないかな」

「それは反対だよ」

四方が首を振った。

「なぜだい、なにが反対だい」

「だって、そうじゃないか。神経細胞は電線と同じように、導電体だ。しかも弱い電流を通す回路なんだ。そこへ高圧電気をかけるとその神経細胞の中に大きな電流が流れて、神経が焼け切れてしまう。そうなれば、人間は即座に死ぬさ」

「いや、電流は流されないようにするんだ。そうすれば神経細胞は焼け切れやしないよ。ねえ、隆夫君、そうだろう」

「さあ、どつちかなあ。ぼくは、そのことをよく知らないから、答えられない」

この問題は懸案になった。

そこへ隆夫の母が、甘味のついたパンをお盆ぼんにのせてたくさん持って来てくれたので、三人はそれをにこにこしてぱくついた。やがてお腹がいっぱいになると、急に疲れが出て来て、睡くなつた。それだから、その日はそれまでということにして、解散した。

さて、その夜のことである。

隆夫はひとりで実験小屋にはいった。

彼は、今日とつて来た録音が気がかりで仕方がなかった。

それで脳波の収録のところを再生してみることにした。つまり、もう一度脳波にして出してみようと思ったのだ。

隆夫は、大急ぎでその装置を組立てた。

それから脳波を収録したテープをくりだして、その送信機につっこんだ。

もちろん隆夫には、その脳波は聞えなかったけれど、検波計けんぱけいのブラウン管で見ると、脳波の出方しゅつりよくが、蛍光板けいこうばんの上に明るいあとをひいてとびまわっているのが見えた。

隆夫は、この脳波を、いかにしてことばに変化したらいいかと考えこんだ。

その間に収録テープは、どんどんくりだされていた。脳波は、泉から流れ出す清流せいらいりゅうのように空間に輻射ふくしゃされていたのだ。

それを気に留めているのか、いないのか、隆夫は腰掛にかけ、背中を丸くして考えこんでいる。

そのとき隆夫のうしろに、ぼーッと人の影が浮び出た。若い男の姿であった。その影の

ような姿は、こまかく慄ふるえながら、すこしずつ隆夫のうしろへ寄よっていく。

「もしもし、一いち畑はた君。君の力を借りたいのです。ぼくに力を貸してくれませんか」
陰気いんきな、不明瞭ふめいりょうなことばが、その怪影かいえいの口から発せられた。

そのとき隆夫は、ふと我れにかえつて、身ぶるいした。そしてふしぎそうに見廻したが遂に怪影を発見して

「あッ。あなたは……」

と、おどろきの声をのんだ。

意外なな名乗り

隆夫たかおは、ぞおーツとした。

急にはげしい悪寒おかんに襲おそわれ、気持がへんになった。目の前に、あやしい人影をみとめながら、声をかけようとして声が出ない。脳貧血のうひんけつの一步手前いっしょてまへにいるようでもある。

(すっかりしなくては、いけないぞ！)

隆夫は、自分の心を激^{げき}励^{れい}した。

「気をおちつけなさい。さわぐといけない。せつかくの相談ができなくなる」

低い音が、落ちつきはらった声で、一語一語をはつきりいって、隆夫の方へ近づいて来た影のような人物。ことばははつきりしているが、顔や姿は、風呂屋の煙^{えんとつ}突から出ている煙のようにうすい。彼の身体を透してうしろの壁にはつてあるカレンダーや世界地図が見える。

(幽霊というのは、これかしらん)

もうろうたる意識の中で、隆夫はそんなことを考える。

「ほう。だいぶん落ちついてきたようだ。えらいぞ、隆夫君」

あやしい姿は、隆夫をほめた。

「君は何物だ。ぼくの実験室へ、無断^{むだん}ではいつて来たりして……」

このとき隆夫は、はじめて口がきけるようになった。

「僕のことかい。僕は大した者ではない。単に一箇の靈^{れい}魂^{こん}に過ぎん」

「れ、い、こ、ん？」

「れいこん、すなわち魂だ」

「えッ、たましいの靈魂か。それは本当のことか」

隆夫はたいへんおどろいた。靈魂を見たのは、これが始めてであったから。

「僕は靈魂第十号と名乗っておく。いいかね。おぼえていてくれたまえ」

「靈魂の第十号か第十一号か知らないが、なぜ今夜、ぼくの実験室へやって来たのか」

隆夫は、まだ気分がすぐれなかった。猛烈に徹夜の試験勉強をした上でマラソン二十キロぐらいやったあとのような複雑な疲労を背負っていた。

「君が呼んだから来たのだ。今夜が始めてではない。これで二度目か三度目だ」

あやしい影は、意外なことをいった。

「冗談をいうのはよしたまえ。ぼくは一度だって君をここへ呼んだおぼえはない」

「まあ、いいよ、そのことは……。いずれあとで君にもはっきり分ることなんだから。それよりも早速君に相談があるんだ。君は僕の希望をかなえてくれることを望む」

靈魂第十号ははじめから抱いていた用件を、いよいよ切り出した。

「話によつては、ぼくも君に協力してあげないこともないが、しかしとにかく、君の礼儀を失した図々しいやり方には好意がもてないよ」

「うん。それは僕がわるかった。大いに謝る。そして後で、いくらでも君につぐないをする、許してくれたまえ」

第十号は、急に態度をかえて、隆夫の前に謝罪しやざいした。

「……で、どんな相談なの」

「それは……」霊魂第十号は、彼らしくもなく口ごもった。

「いいにくいことなのかね」

「いや、どうしても、今、いつてしまわねばならない。隆夫君、僕は君に、しばらく霊魂だけの生活を経験してもらいたいんだ。承知してくれるだろうね」

「なに、ぼくが霊魂だけの生活をするって、どんなことをするのかね」

「つまり、君は今、肉体と霊魂との両方を持っている。それでだ、僕の希望をききいれて、君の霊魂が、君の肉体から抜けだしてもらえばいいんだ。それも永い間のことではない。三カ月か四カ月、うんと永くてせいぜい半年もそうしていてもらえばいいんだ。なんとやさしいことではないか」

あやしい影は、隆夫が目を白黒するのもかまわず、奇抜きぼつな相談をぶつつけた。

「だめだ。第一、ぼくの霊魂をぼくの肉体から抜けといても、ぼくにはそんなむずかし

いことはできない。それにぼくは現在ちゃんと生きているんだから、靈魂が肉体をはなれることは不可能だ」

「ところが、そうでなく、それが可能なんだ。そして又、君の靈魂に抜けてもらう作業については、すこしも君をわずらわさないでいいんだ。僕がすべて引き受ける。君はただそれを承知しさえすればいいんだ。めったにないふしぎな経験だから、後で君はきつと僕に感謝してくれることと思う。承知してくれるね」

隆夫はこの話に心を動かさないわけでもなかった。しかし、不安の方が何倍も大きかった。もつと相手が、自分に十分の安心をあたえるように説明してくれたら、一カ月やそこいらなら靈魂だけでとびまわってみるのもおもしろかろうと思った。

が、そのときだった。隆夫は急に胸むな苦くるしさをおぼえた。はっとおどろくと、あやしい影が隆夫のくびをしめつけているではないか。

「なにをする。ぼくはまだ承しょう諾だくしていかないぞ。それはともかく、人ひと殺ころしみたいに、ぼくのくびをしめるとはなにごとだ」

隆夫は苦しい息の下から、あえぎあえぎ、相手をののしった。

「はははは。はははは」

相手は、ほがらかに笑いつづける。隆夫は腹が立ってならなかった。しかし自分の意識が刻々うすれていくのに気がつき恐慌きょこうした。

「はははは。もうすこしの辛棒しんぼうだ」

「なにを。この野郎」

隆夫は、残っているかぎりの力を拳こぶしにあつめ、のしかかってくる相手の上に猛烈なる一撃を加えた——と思つた。果して加え得たかどうか、彼には分らなかつた。彼は昏倒こんとうした。

早朝の訪問者

その翌朝よくあさのことであつた。

三木健が、自分の家の玄関脇の勉強室で、朝勉強をやっていると、玄関に訪とう人の声があつた。

三木はすぐ玄関へ出て扉をあけた。

「お早ようございます。名津子さんの御容態ごようだいはいかがですか。お見舞にあがりました」
 「はッはッはッ。よしてくれよ、そんな大時代な芝居がかりは……」

三木は腹を抱えて笑った。

というわけは、玄関の扉をあけてみると、そこに立っているのは余人にあらず、仲よし友達のひとりである一畑いちへた隆夫であつたから。その隆夫が、なんだって朝つばらからやってきて、この鹿爪しかつめらしい口のききかたをするのか、それは隆夫が三木をからかっているのだとしか考えられなかつた。

「これはこれは健君。失敬をした。許してくれたまえ。姉さんに会いたいんだがね、よろしくたのむ」

隆夫は、三木が笑つたときに、どういふわけかあわてて逃げ腰になつた。が、すぐ立ち直つて、このように応対おうたいをした。

三木は、べつに隆夫のことを何とも思つていなかった。

「うん。それじゃ今母に知らせてくるからね。ちよつと待っていてくれ」

「いや、待てない。すぐ会いたい」

隆夫はひどく急いでいる。三木は、隆夫のおしの強いのに、すこし気をわるくした。だが大したことではないと、三木はすぐ自分の気持を直した。

「でも、病人だからね、様子を見た上でないと、かえって病気にさわると悪いから」

「じゃあ早くしてくれたまえ」

「よしよし」

三木は母親のところへとんで行って、今、隆夫君が来てこうこうだと話した。母親は、昨夜親切に隆夫たちが来て、器械を使って調べていってくれたことをたいへん感謝していて、それでは病人の様子を見ましようとして、病室にはいった。

名津子は、血の気のない顔で、髪を乱したまま、すやすやと睡っていた。

そこで母親は三木のところへ戻って来て、今病人は疲れ切ってすやすや睡っているから、目がさめるまで、しばらくの間、隆夫さんに待っていてもらおうようにといった。

三木は、そのことを隆夫のところへ来て話した。

すると隆夫は、大いに不満の顔つきになって、

「君たちは、ぼくを名津子さんに会わせまいとするんだな。けしからんことだ」と、意外にきついことばをはいた。

これには三木もあきれてしまった。そんなことがあるはずはない。隆夫はなにをかんちがいしているのであらうかと、三木はそれからいくどもくりかえして、昨夜姉が**あばれ**たり泣いたり、叫んだりして、ほとんど一睡もしなかつたことを語り、

「……だから、今疲れ切つてすやすや睡つているんだ。できるだけゆっくりねかしておきたい、でない、姉は衰弱がひどくて、**重態**に陥る危険があるのだ」

という、隆夫は、なるほど、そうかそうかと合点して、ややおとなしくなった。しかし名津子の目がさめたら、すぐ自分のところへ知らせること、そしてすぐ自分を病室へつれていつて名津子にあわせることを、くどくどとのべて、三木に約束させた。

三木は、このときになつて、拭い切れない疑問を持つに至つた。

(どうも隆夫君の様子がへんだぞ。なぜ今日になつて、姉に会いたがるのか、さつぱりわけが分らない。昨夜の実験の結果、急に姉に会う必要が生じたのかしら。それならそれといいそんなものだが……。なんだか隆夫君までおかしくなつて来た)

隆夫は、三木の勉強部屋へ通された。

しかし彼は三木に向きあつたまま、急に無口になつてしまつた。なにかしきりに考えこんでいるようである。ふだんの明るい隆夫の調子は見られない。

そこで三木は、話しかけた。

「昨夜、電波収録装置でんぱしゅうろくそうちに取つていった、あれはどうしたね。結果は分ったかい」

「あれか。あれはよく取れていたよ」

「そうか。するとあれを使つて、これからどうするのか」

「どうするつて。さあ……」隆夫は困つた顔になつた。

「どうするつて、とにかくあれは参考になるね」

「君は、もしあの中に、電波が収録されていたら大発見だ。そしてそうであれば姉の病氣についても、新しい電波治療が行えることになろうといつていたが、それはどうだね」

隆夫はなぜか狼狽ろうばいの色を見せ、

「いや、そんなことはでたらめだ。病人を電波の力で癒なおすなんて、そんなことは出来るものではない」

「おかしいね。さつき君のいったこともくいちがつているし、君が日頃語つていたところともちがう。いつたいどれが本当なんだ」

「断だんじて、僕はいう。君の姉さんの病氣はきつと僕がなおして見せる。そのかわり、昨日僕がいったことは、一時忘れていてくれたまえ。今日から僕は、新しい方法によつて、名

津子さんの病氣を完全になおしてみせる。もし不成功に終つたら、僕はこの首を切つて、君に進呈するよ」

そういつて隆夫は、自分のくびを叩いた。ひどく昂奮こうふんしている様子だった。

そのとき母親がはいつてきて、名津子が目がさめたようですから、と隆夫たちを迎えに来た。

昨日にかわり隆夫の様子がちがつているのは、どうしたことであろうか。

ここは何処どこ

ここまで書いてくると、賢明なる読者は、怪しい隆夫のふるまいのうしろに何が有るかを、もはや察せられたことであろう。

そのとおりである。

名津子を見舞に来た隆夫は、その肉体はたしかに隆夫にちがいないが、その肉体を支配

している靈魂れいこんは、隆夫の靈魂ではないのだ。それは例の靈魂第十号なのである。

前夜隆夫は、とつぜん靈魂第十号の訪問をうけ、そして肉体を半年ほど借りたから承知をしろと申入れられた。隆夫は、それをことわった。すると隆夫は、とつぜん首をしめられ、人事不省じんじふせいに陥ったのだ。

その直後、どういう手段によつたものか分らないが、隆夫の肉体から隆夫の靈魂が追いつ出され、それにかわつて靈魂第十号がはいりこんだのである。まさにこれはギャング的靈魂だといわなくてはならない。

とにかくこんなわけだから、翌日隆夫が三木家をたずねたとき、とんちんかんのことばかりいい、家人から不審ふしんをかけられたのだ。つまり第十号としては、隆夫の靈魂に入れ替かわつたものの、すべて隆夫のとおりをまねることはできなかつたし、また隆夫の記憶や思想をうまく取り入れることは一層むずかしかつた。

だが、第十号としては、すこしぐらい人々から怪しまれることは、がまんするつもりだつた。それよりも、彼がねらつてゐることは、名津子に近づくことだつた。名津子の靈魂にびつたり寄りそつていたいばかりに、彼はこの思い切つた行動を起したので。しかしながら、彼の筋書すしがきどおりに、万事がうまくいくかどうか、それはまだ分らない。

それはそれとして、一方、靈魂第十号のために肉体から追い出された隆夫の靈魂は、一体どうなったのであろうか。

彼の靈魂は、肉体と同じに、一時もろうろ状態に陥っていた。いや、時間的にいえば、肉体の場合よりもはるかに永い間にわたつてもうろろ状態をつづけていた。第十号が、彼の肉体にはいりこんで、三木健の家を訪問してぺちやくちやしやべつているときにも、隆夫の靈魂は、まだもうろろとして、はてしなき空間をふわついていた。

彼のたましいが、われにかえたのは、それから十四日ののちのことだった。

たましいが、われにかえるというのは、おかしい方であるが、肉体の中にはいつているときでも、たましいというやつは、よく死んだようになつたり、生きかえつたりするものである。ねむりと目ざめ。不安におちいることと大自信にもえること。人事不省と覚か醒くせい。酔よっぱらいと酔いざめ。そのほか、いろいろとあるが、このようにたましいというやつは、いつも敏びんかん感で、おどおどしており、そして自分からでも、また他からの刺戟しげきによつても、すぐ簡単に状態を変える。

とにかく、彼のたましいがわれにかえたとき、「おやおや」と起きあがつてあたりを見まわすと、見なれないところへ来ていることが分つた。

そこは、かれくき枯草がうず高くつんであるすばらしく暖かな日なただった。ゆらゆらと、かげろうが燃え立っていた。その中に、隆夫の靈魂は立っているのだった。彼の靈魂も、かげろうと同じように、ゆらゆら動いているような気がした。

前方を見ると、美しい大根畑が遠くまでひろがっていた。まるでゴツホの絵のようであった。

うしろの方で、モーという牛の声がした。うしろには小屋が並んでいた。そのどれかが牛小屋になっているらしい。

かたかたかたと、いやに機械的なひびきが聞えてきた。ずっと西の方にあたる。その方へ隆夫の靈魂はのびあがった。トラクターが動いているのだった。土地を耕たがやしている。それは遥はるかな遠方だった。

「広いところだなあ。一体ここはどこかしらん」

すると、彼の前へ、とつぜんパイプをくわえ、肩に鍬くわをかついだ農夫が姿をあらわした。そして農夫の顔を見たとき、隆夫のたましいは、あつとおどろいた。

「ややッ、ここは日本じゃないらしい」

農夫は白はくじん人だった。

白人の農夫がいるところは、日本にはない。しばらくすると、小屋のうしろから、若い女の笑い声が聞えて、隆夫のたましいの前へとび出して来たのは、三人の、目の青い、そして金髪きんぱつやブロンドの娘たちだった。

「たしかにここは日本ではない。外国だ。どうして外国へなど来てしまったんだろう」
そのわけは分らなかつた。

隆夫のたましいは、農夫たちの会話を聞いて、それによつてここがどこであるかを知ろうとつとめた。彼らの話しているのは、外国語であつた。それはドイツ語でもなく、スラブ語でもなかつたが、それにどこか似ていた。ことばとしては、隆夫はそれを解かい釈しゃくする知識がなかつたけれど、幸いというか、隆夫は今たましいの状態にいますので、彼ら異国人の話すことばの意味だけは分つた。

そして、ついにこの場所がどこであるかという見当がついてきた。それによると、ここはバルカン半島のどこかで、そして割合にイタリアに近いところのように思われる。ユーゴスラビア国ではないかしらん。もしそうなら、アドリア海をへだててイタリアの東岸とうがんに向きあつてゐるはずだった。

どうしてこんなところへ来てしまつたんだろう。

霊魂れいこんの旅行

だんだん日がたつにつれ、隆夫のたましいは、たましい慣なれがしてきた。はじめは、どうなることかと思つたが、たましいだけで暮していると、案外気楽なものであつた。第一食事をする必要もないし、交通こうつう禍かを心配しないで思うところへとんで行けるし、寒さ暑さのことで衣服の厚さを加減かげんしなくてもよかつた。そして、睡りたいときに睡り、聞きたいときに人の話を聞き、うまそうな料理や、かわいい女の子が見つければ、誰に追いつたられることもなく、いく時間でもそのそばにへばりついていられた。もつとも、そのうまそうな御馳走を味わうことは、たましいには出来なかつたが……。

そういうわけで、隆夫のたましいは、一時東京の家のことや母親のことや、それから友だちのことなどもすっかり忘れて、気軽なたましいの生活をたのしんでいた。

いつも寝起きしていた枯草の山が、トラックの上へ移しのせられ、どこかへはこぼれて

いく。それを見た隆夫のたましいは、いつしよにそのトラックに乗って行つてみようと思つた。

その日は、天氣が下り坂になつて来て風さえ出て来たので、農夫たちは急いで枯草かれくさを車へのせ、その上をロープでしっかりしばりつけた。それから荷主の農夫が、パイプをくわえたまま、トラックの運転手にいつた。

「とにかくカツタ口の町へはいつたら、海岸かいがんどおり通のヘクタへうえきしやうかい貿易商會はどこだと聞けば、すぐに道を教えてくれるからね」

「あいよ。うまくやつてくるよ」

トラックは走りだした。

隆夫のたましいは、枯草の中へ深くもぐりこんで、しばらく睡ることにした。車が停つたら、起きて出ればよいのだ。そのときはカツタ口の町とかへ、ついているはずだ。

たましいは、ぐっすり寝こんだ。

運転手の大きな声で、目がさめた。枯草をかきわけて出てみると、なるほど町へついていた。古風こふうな町である。が、町の向うに青い海が見える。港町だ。

港内には、大小の汽船が七八隻そつていはく碇泊している。西日が、汽船の白い腹へ、かんかんと

あたっている。

トラックが、また走りだした。

港の方を向いて走る。隆夫のたましいは、車上からこの町をめずらしく、おもしろく見物した。革命と戦火にたびたび荒されたはずのこの港町は、どういうわけか、どこにも被害のあとが見られなかった。そしてどこか東洋人に似た顔だちを持った市民たちは、天国に住んでいるように晴れやかに哄笑こうしょうし微笑し空をあおぎ手をふって合図をしていた。婦人たちの服装も、赤や緑や黄のあざやかな色の布ぬのや毛糸を身につけて、お祭の日のように見えた。

そのうちにトラックは、海岸通へ走りこんで、ヘクタ貿易商会の前に停った。枯草は、この商会が買い取るらしい。そのような取引を、隆夫のたましいは見守っていたくはなかった。彼は、今しも岸壁がんべきをはなれて出港するらしい一隻の汽船に、気をひかれた。

彼は燕つばめのように飛んで、その汽船のマストの上にとびついた。ゼリア号というのが、この汽船の名だった。五百トンもない小貨物船であった。

それでも岸壁には、手をこつちへ振っている見送り人があった。船員たちが、ハンドレールにつかまって、帽子をふって、岸壁へこたえている。煙突えんとつのかげからコックが顔を

出して、ハンカチをふっている。隆夫のたましいが、つかまっているマストの綱つなばしごにも、二三人の水夫がのぼって、帽子を丸くふっていた。かもめでもあろうか、白い鳥がしきりに飛び交っている。その仲間の中には、隆夫のたましいのそばまで飛んできて、つきあたりそうになるのもいた。

「港外まで出ないと、ごちそうを捨ててくれないよ」

「早く捨ててくれるといいなあ。ぼくは腹がへっているんだ」

かもめは、そんなことをいいながら、この汽船が海へ捨てるはずの調理室ちようりしつの残りかすを待ちこがれていた。

隆夫のたましいは、久しぶりにひろびろとした海を見、潮しほのにおいをかいで、すっかりうれしくなり、いつまでも眺めていた。白い航跡こうせきが消えて、元のウルトラマリン色の青い海にかえるところあたりに、執しゅうねん念ねんぶかくついてきた白いかもめが五六羽、しきりに円を描いては、漂ひょう流りゅうするごちそうめがけて、まい下りるのが見られた。

船の舳しほが向いている方に、ぼんやりと雲か島か分らないものが見えていたが、それは陸地だと分った。左右にずつとのびている。そうだ、あれだ、イタリア半島なのだ。するとこの船はイタリア半島のどこかの港にはいるのにちがいない。一体どこにつくのだろうか。

隆夫のたましいは、もうすっかり大胆だいたんになっていたので、マストをはなれて下におりてきた。

そして船橋せんきょうへとびこんだ。そこには船長と運転士と操舵手そうたしゆの三人がいたが、誰も隆夫のたましいがそこにはいつてきたことに気のつく者はいなかった。

その運転士が、航海日記をひろげて、何か書きこんでいるので、そばへ行つて見た。その結果、この汽船は、対岸たいがんのバリ港へ入るのだと分つた。

やがてバリ港が見えてきた。

小さな新興しんこうの港だ。カツタ口港とは全然おもむきのちがった港だった。そのかわり、町をうずめている家々は、見るからに安普請やすぶしんのものばかりであった。戦乱せんらんの途中で、ここを港にする必要が出来て、こんなものが出来上つたらしい。殺風景で、いい感じはしなかった。

入港がまだ終らないうちに、隆夫のたましいは汽船ゼリア号に訣別けつべつをし、風のように海の上をとび越えて、海岸へ下りた。

不潔きわまる場所だった。見すばらしい人たちが、蠅はえの群のように倉庫の日なたの側に集っている。隆夫のたましいは、ペツと唾つばをはきたいくらいだったが、それをがまんして、

ともかくも彼らの様子をよく拝見するために、その方へ近づいていった。

一人の男が、ぼろを頭の上からまどつて棕櫚しゆろの木にもたれて、ふところの奥の方をぼりぼりかいていた。隆夫のたましいは、その男の顔を見たとき、

「おやッ」

と思つた。どこかで見た顔であつた。

大奇遇だいきぐう

隆夫たかおのたましいは、そのあわれな人物の顔を、何回となく近よつて、穴のあくほど見つめた、彼は、そのたびにわくわくした。

「どうしても、そうにちがいない。この人はぼくのお父さんにちがいない」

隆夫の父親である一畑いちへはたはるあきはかせ治明博士は、永く歐洲に滞在して、研究をつづけていたが、今から四、五年前に消息をたち、生きていても死んだとも分らなかつた。が、多分あの

はげしい戦禍せんかの渦の中にまきこまれて、爆死ばくししたのであろうと思われていた。その方面からの送還そうかんや引揚者の話を聞き歩いた結果、最後に博士を見た人のいうには、博士は突然スイスに姿をあらわし、一週間ばかり居たのち、危険だからスエーデンへ渡るとその人に語ったそうで、それから後、再び博士には会わなかったという。

では、スエーデンへうまく渡れたのであろうか。その方面を聞いてもらったが、そういう人物は入国していないし、陸路はもちろん、空路によってもスイスからスエーデンへ入ることは絶対にできない情勢にあつたことが判明した。

そこで、博士はスイス脱出後、どこかで戦禍を受け、爆死でもしたのではなからうかという推定が下されたのであつた。

ところが今、隆夫のたましいを面くらわせたものは、イタリアのバリ港の海岸通の棕櫚しゅろの木にもたれている男の顔が、なんと彼の父親治明博士に非常によく似ていることであつた。

「お父さん。お父さん。ぼく隆夫です」

と、隆夫のたましいは呼びかけた。くりかえし呼びかけた。

だが、相手は知らぬ顔をしていた。顔の筋一つ動かさなかつた。

隆夫のたましいは失望した。

「すると、人ちがいなのだろうか」

すつかり悲観したが、なお、あきらめかねて隆夫のたましいは男の上をぐるぐるとびながら、彼のすることを見守っていた。

男は、木乃伊ミイラのように動かなかつた。棕櫚の木に背中をもたせかけたままであつた。ところが一時間ばかりした後、その男はすこし動いた。彼は座り直した。片坐かたざぜん禅のように、片足を手でもちあげて、もう一方の脚の上に組んだ。それから両手を軽く握り目をうすく開いて、姿勢を正した。彼はたしかに無念無想の境地きょうちにはいろいろとしているのが分つた。隆夫のたましいは、これはなにか変つたことが起るのではないかと思ひ、ふわふわとびまわりながら、いつそう相手に注意をはらつていた。

すると、その男の頭のとつぺんのすぐ上に、ぼーつとうす赤い光の輪が見えだした。ふしぎなことである。隆夫のたましいは、まわるのをやめて、それを注視ちゆうしした。

ふしぎなことは、つづいた。こんどは男の上半身の影が二重になつたと見えたが、その一つが動き出して、ふわりと上に浮いた。それはシャボン玉を夕暗ゆうやみの中にすかしてみたいように、全体がすきとおりに、そして輪廓りんかくだけがやつと見えるか見えないかのものであり、

形は海坊主うみぼうずのように、丸味をおびて凸凹でこぼこした頭部とうぶとおぼしきものと、両肩に相当する部分があり、それから下はだらりとして長く裾すそをひいていた。また、頭部には二つ並んだ目のようなものがあつて、それが別々になつて、よく動いた。しかしその目のようなものは、卵をたてに立てたような形をし、そしてねずみ色だった。

「おお、隆夫か。どうしたんだ、お前は」

と、そのあやしい海坊主はいつて、隆夫のたましいの方へ、ゆらゆらと寄つてきた。

「あ、やつぱり、お父さんでしたか」

隆夫のたましいは、海坊主みたいなものが、父親治明博士のたましいであることに気がついた。

ああ、なんとというふしぎなめぐりあいであろう。祖国を遠くはなれたこのアドリア海の小さい港町で、父と子が、こんな靈れいてき的なめぐりあいをするとは、これが宿命しゆくめいの一頁で、すでにきまつていたこととはいえ、奇遇きぐうちゆう中の奇遇といわなくてはなるまい。

「お父さん。よく生きていて下さいました。親類でもお父さんのお友だちも、ほとんど絶望して、お父さんはもう生きてはいないだろうと噂うわさしているんですよ。よく生きていて下さったですね」

隆夫のたましいは、うれしさいっぱいで、父親のたましいにすがりついた。

「うん、みんなが心配しているだろうと思った。しかし知らせる方法もなかった。それにわしとしても、明日生命を失うか、あるいは一時間後、十分後に生命を失うかも知れず、おそろしい危険の連続だった。いや、今も安心はしてられないのだ。それはいいが、お前はどうしたんだ。さつきから、いぶかしく思っているんだが、お前の肉体はどこにあるんだ」

父親は、心配の様子。

慈愛じあいふかい父親の心にふれると、隆夫のたましいは、悲しさの底にせずんで、

「お父さん。聞いて下さい。こうなんです」

と、これまでに起つたことを、父親に伝えたのであった。

靈魂れいこんの研究者

すべての事情を、隆夫のたましいから聞きとった父親治明博士のたましいは、大きなおどろきの様子を示した。

「それは、実におそろべき相手だ。そういうひどいことをする靈魂は、尋常じんじょういちじょう一様のものではないよ。たいへんな力を持っている奴だ。これはかんたんには行かないぞ。いったい何者だろう」

父親のおどろきが、意外に大きいので、こんどは隆夫の方でおどろいてしまった。しかしこのとき隆夫は、父親のおどろきとなつた素因そいんのすべてを知っているわけではなかった。披は、まだ靈魂界のことについては、ほんのわずかのことしか知らないのであった。

「お父さん。そんなに、あの靈魂は、おそろべき奴ですか。ぼくには、何もかも、さっぱり分らないのです。いったい、靈魂というものが出たり、はいったりするのは、どういう法則に従うものでしょうか。いや、それよりも、ぼくは靈などというものが、ほんとにあることを、こんどはじめて知ったのです。お父さんは、それについて、くわしく知っているようですね」

隆夫のたましいは、次から次へとわきあがる疑問やおどろきを、父親の前にならべたてた。

「靈魂の學問は、なかなか手がこんでいるんだ。つまり複雑なのだ。古い時代にいいだされたでたらめの靈魂説から始まって、最新の靈魂科學に至るまで、実に多数の靈魂説があるのだよ。わしは、お前も知っているとおり、せいかがく生化學とぶつしつこうぞうろん物質構造論などの方からはいいこんで、新しい靈魂科學の発見に努力して来た。その結果、わしは、靈魂なるものは、たしかに存在することを証明することができた。そればかりでなく、こうして実際に靈魂を活動させることにも成功した。そこでわしは、さらに深く靈魂科學の研究をしようと今も努力しているわけだが、残念なことに戦火に追われて、研究室をうしない、それからさすらいの旅がはじまり、いろいろな困難や災害にあつて、こんなひどい姿で食くうや食くわらずの生活をつづけている始末だ。ああ、わしは、早く落ちついた研究室にはいりたい。むしろこの際、日本へ帰るのが、その早道だとも思い、こうして機会を待っているわけなんだ」

父親治明博士のたましいは、これまでの経過をかいつまんで話した。

「普通に、たましいというとね、肉体にびつたりついていてるものだが、ある場合には、肉体をはなれることもあるんだ。肉体のないたましいというものも、實際はたくさんごろごろしている。そういうたましいが、肉体を持っていて別のたましいに、とりつくことがよく起る。お前がさつき、わしに話をして聞かせた名津なつこ子さんの場合なんか、それにちがいで

ない。つまり、名津子さんの肉体といっしょに居る名津子さんのたましいの上に、あやしい女のたましいが馬乗りにのっているんだと考えていい。二つのたましいは、同じ肉体の中で、たえず格闘かくとうをつづけているんだ。だから名津子さんが、たえず苦しみ、好きなことを口走るわけだ」

「なるほど、そうですね」

「名津子さんの場合は、普通よくあるやつだ。しかしお前の場合は、非常にかわっている。お前を襲撃しゅうげきした男のたましいは、お前の肉体からお前のたましいを完全に追い出したのだ。そういうことは、普通、できることではないのだ。だから、さつきもいったように、その男のたましいなるものは、非常にすごい奴にちがいない。いったい、何奴なにやつだろう」

治明博士は、再びおどろきの色をみせて、そういった。

隆夫のたましいは、父親のいうことを聞いていて、なんだか少しずつわけが分ってくるように思った。と同時に、また別のいろいろの疑問がわいてきた。ことに、彼が信用しかねたものは、たましいの姿のことであった。目の前に見る父親のたましいは、海坊主が白いきれを頭からかぶって、それに二つの目をつけたような姿をしている。ところが、隆夫の実験小屋へはいつて来て、彼のたましいを追い出し、彼の肉体を奪うばった怪物は、ちゃん

と男の姿をしていた。同じたましいでありながら、なぜこのように、姿がちがうのであろうか。この疑問を、父親にただしたところ、父親のたましいは、次のように答えた。

「たましいというものはね。たましいの力次第しだいで、いろいろな形になることが出来る。実は、本当は、たましいには形がないものだ。まるで透明なガス体か、電波のように。が、しかし、たましいには個性こせいがあるので、なにか一つの姿に、自分をまとめあげたくなるものだよ。これはなかなかむずかしい問題で、お前にはよく分らないかも知れないが、お前は、自分で知っているかどうかしらんが、お前はおたまじやくしのような姿をしているよ。つまり日本の昔の絵草紙えぞうしなんかに出ていた人間と同じような姿なんだ。これはお前が、たましいとは、そんな形のものだと前から思っていたので、今はそういう形にまとまっているのだ」

「へえーッ、そうですかね」

と、隆夫は、はじめて自分のたましいの姿がどんな恰かつこう好こうのものであるかを知って、おどろき、且かつつあきれた。

「それはいいとして、お前の肉体を奪った悪靈あくれいを、早く何とか片づけなさいいけない」
父親治明博士は苦しそうに喘あえいだ。

城壁の聖者

その夜、するどくどがった新月が、西空にかかっていた。

ここはバリ港から奥地へ十マイルほどいったセラネ山頂にあるアクチニオ宮殿の廃墟であった。そこには山を切り開いて盆地が作られ、そこに巨大なる大理石材を使つて建てた大宮殿があつたが、今から二千年ほど前に戦火に焼かれ、砕かれ、そのあとに永い星霜が流れ、自然の力によつてすさまじい風化作用が加わり、現在は昼間でもこの廃墟に立てば身ぶるいが出るという荒れかたであつた。

しかも今宵は新月がのぼつた夜のこととて、崩れた土台やむなしく空を支えている一本の太い柱や首も手もない神像が、冷たく日光を反射しながら、聞えぬ声をふりしぼつて泣いているように見えた。

一ぴきの狼が突如として正面に現われ、うしろを振り返つたと思うと、さつと城壁のかけ

にとびこみ、姿を消した。いや、狼ではなく、飢えたる野良犬であつたかも知れない。その犬とも狼ともつかないものが振返つた方角から、ぼろを頭の上からかぶつた男がひとり、散乱した円柱や瓦礫の間を縫つて、杖をたよりにとぼとぼと近づいてきた。

彼は、たえず小さい声で、ぼそぼそと呟いていた。

「……しつかり、ついてくるんだよ、わしを見失つては、だめだよ。……もうすぐそこなんだ。多分見つかると思うよ。アクチニオ四十五世さ。新月の夜にかぎつて、廢墟の宮殿の大広間に、一統と信者たちを従えて現われ、おごそかな祈りの儀式を新月にささげるのだよ。……隆夫、わしについてきているのだろうね。……そうか。おお、よしよし。もうすこしの辛抱だ。わしはきつとアクチニオ四十五世を探し出さにおかない」

と男は、杖をからんからんとならしながら、空に向つて話しかける。

彼こそ、隆夫の父親の治明博士であつたことはいうまでもない。彼は、奇しきめぐりあひをとげた愛息隆夫のうつろな靈魂をみちびきながら、ようやくこれまで登つてきたのである。

隆夫のたましいは、どこにいる？

彼の姿も形も、まるでくらげを水中にすかして見たようで、はつきりしないが、治明博

士の頭上、ややおくれ勝ちに、丸味をもった煙のようなものがふわふわとついて来るのが、それらしい。

博士は、杖を鳴らしながら、はいきよ廃墟の中を歩きまわった。大円柱が今にもぐらツと倒れて来そうであった。宙にかかったアーチが、今にも頭の上からがらどツと崩れ落ちて来そうであった。博士は、そういう危険をもともせず、土台石の山を登り、わずかの間か隙をすりぬけて、アクチニオ四十五世たちのきとうじよう祈禱場をなおも探しまわった。どこもここも墓場はかばのようにしずかで、祈りの声も聞えなければ、人の姿も見えなかった。

博士は、泣きたくなる心をおさえつけながらもよろめく足を踏みしめて、なおも廃墟の部屋部屋をたずねてまわるのだった。

「あ、あそこだ！」

とつぜん博士は身体をしゃちこぼらせた。博士は目をあげて見た。そこは西に面した高い城壁の上であったが、あわい月光の下、人影とおぼしきものが数十体、まるで将棋しょうぎの駒こまをおいたように並んでいるのであった。

だが、誰一人として動かない。何の声も聞えて来ない。明かり一つ見えない。

それでも、それがアクチニオ四十五世のいちだん一団であることを認めた。博士は急に元気づ

き、その方へ足を早めていった。博士は、間もなく高い壁に行方を阻はよまれた。が博士は、すこしもひるむことなく、城壁じょうへきの崩れかけた斜面しゃめんに足をかけ手をおいて、登りだした。

時間は分らないが、やっと博士は城壁を登り切った。二時間かかったようでもあり、三十分しかかからなかったようでもあった。

「ああ……」

博士は眼がん前ぜんにひらける巖げん肅しゆくなる光景にうたれて、足がすくんだ。

城壁の上の広場に、約四五十人の人々が、しずかに月に向つて、無言むごんの祈いのりをささげている。一段高い壇だんの上に、新月を頭上に架かけたように仰いで、ただひとり祈る白衣はくいの人物こそ、アクチニオ四十五世にちがいがいなかった。

博士は、すぐにも聖せい者しやの足許あしもとに駆かけよつて、彼の願ねがい事を訴こえるつもりであつたが、それは出来なかつた。足がすくみ、目がくらみ、動悸どうきが高鳴つて、博士はもう一步も前進をすることが出来なかつたのである。

博士は石床いしどこの上にかけて、化石かせきになつたように動かなかつた。それから幾時間も動くこともできず、博士はそのままの形でいた。博士は氣を失つていたので、睡つていたの

でもない。博士はその間その姿勢ではとても見ることできないはずの、聖なる新月の神うごう々しい姿を心眼の中にとらえて、しっかりとおが拝んでいたのだ。

風が土砂どしやをふきとばし、博士の襟元えりもとにざらざらとはいって来た。どこかで鉦しやうの音がするようだ。

「顔をあげたがよい」

さわやかな声が、博士の前にひびいた。

はっと、博士は顔をあげた。

「あ、あなたはアクチニオ四十五世！」

ロザレの遺骸いがい

いつの間にか、聖者せいじゃは博士の前に近く立っていた。ふしぎである。博士は、自分の現在の居場所を知るために、あたりに目を走らせた。依然いぜんとして、同じ城壁の上に居るので

あつた。だが、アクチニオ四十五世のうしろに並んで新月しんげつを拜まじんでいた同形どうけいの修行者たちはただの一人も見えなかった。残っているのは、聖者ただひとりであつた。

「ああ、聖者……」

「分わかっている。わしについて来きたれ」

聖者は博士の願いについて一言も聞かず、自分のうしろに従したがい来れといったのだ。博士は、奇蹟に目をみはりながら、石床いしどこをけて立つた。聖者は氣高く後姿を見せて、しずかに歩む。博士はその姿を見失うまいとして、後を追つていった。そのとき氣がついたことは、新月は既に西の地平線に落ちて、あたりは濃い闇の中にあつたことである。しかもふしぎに、聖者の後姿と、通り路とは、はつきり博士の目に見えているのだった。

博士は聖者アクチニオ四十五世について城壁の上をずんずんと歩いていくうちに、いつしかトンネルの中にはいつているのに氣がついた。うす暗い、そして奥が知れない、氣味のわるいトンネルであつた。トンネルの道は、自然に下り坂になつて、今歩いているところは既に地下へもぐつてしまつたらしく、プーンとかびくさい。

どこからともなく、黄いろのうす明りがさし、トンネルの中の有様を見せてくれる。トンネル内は、通路が主であるが、ところどころそれが左右へひろげられて大小の部屋にな

つていた。そしてその部屋には、土や石で築いた寝台のようなものがあり、壁にはさまざまの浮き彫りで、絵画や模様らしきものや不可解な古代文字のようなものが刻まれてあった。

聖者はずんずんと奥へは行っていったが、そのうちに、一つの大きな丸い部屋のまん中に見えているりっぱな大理石の階段を下りていった。博士も、もちろんあとに従った。

「あ……」

博士は、階段を途中まで下りて、その下に見えて来た地下房の異様な光景に思わずおどろきの声を発した。

そこには、意外にも、たくさんの人が集っていた。そのほとんど皆が、壁にもたれて立っていた。みんなやせていた。そして燻製の鮭のように褐色がかった。

既に下り切っていた聖者が、治明博士の方へふり向いて、早く下りて来るようにとさし招いた。

今は、博士は恐ろしさも忘れ、下りていった。

聖者アクチニオ四十五世は、自分の前において、壁にもたれているミイラのような人間を指し、

「わが弟子たりしロザレの遺骸である。これを汝にしばらく貸し与える」

「えつ、この人を——この遺骸をお貸し下さるとは……」

と、治明博士は、問いかえした。

「今、ロザレの靈魂は他出している。されば後、ロザレの遺骸に汝の子の隆夫のたましいを住まわせるがよい」

「あ、なるほど。すると、どうなりますか……」

「生きかえりたるロザレを伴い、汝は帰国するのだ。それから先のことは、汝の胸中に自ら策がわいて来るであろう。とにかくわれは、汝ら三名の平安のために、今より呪文を結ぶであろう。しばらく、それに控えていよ」

「ははッ」

治明博士は、アクチニオ四十五世の神秘的な声に威圧せられて、はッと、それにひれ伏した。

聖者は、不可解なことばでもつて、ロザレの遺骸に向つて呪文を唱えはじめた。呪文の意味はわからないが、治明博士は、自分の身体の関節が、ふしぎにもぎしぎしときしむのに気がついた。

(汝ら三名の平安のために——と、聖者はいわれた。汝ら三名とは、いったい誰々のことであろう)と、治明博士は、ふと謎のことばを思い出していた。自分と、それから——そうだ、隆夫のことだ。隆夫は、どうしているであろうか。さつき城壁の上に聖者の姿を拝してから、自分の心は完全に聖者のことではいっぱいとなつて、隆夫がついて来ているかどうかを確かめることを怠つていた。隆夫はどうしているだろうか。——いやいや、万事は、聖者が心得ていて下さるのだ。尊き呪文がなされているその最中に、他の事を思いわずらつては、聖者に対し無礼となるのは分り切つている。慎まねばならない。

呪文の最後のことばが、高らかに聖者の口から唱えられ、そのために、この部屋全体が異様な響をたて、それに和して、何百人何千人とも知れない亡霊の祈りの声が聞えたように思つた。治明博士は、気が遠くなつた。

「これ、起きよ、目ざめよ。旅の用意は、すべてととのつた。これ一畑治明。汝の供は、既に待つてゐるぞ。早々、連れ立つて、港へ行け」

聖者の声は、澄みわたつて響いた。治明博士ははつと気がついて、むくむくと起上ると、あたりを見まわした。

そこは、はじめ登つていた城壁の上であつた。夜は既に去り、東の空が白んでいた。そ

ここに立っているのは治明博士ただひとり……いやもう一人の人物がいた。

「君は」

と、治明博士は、横に立っていたかっしょく褐色の皮膚を持ったや痩せた男へおどろきの目を向けた。どこかで見た顔ではあるが……。

「お父さん、ぼくですよ。隆夫ですよ。ぼくは、さつきから、このとおりロザレの肉体を貸してもらっているのです。これで元気になりましたから、早く戻ることにしようよ」
と、そのミイラの如き人物は、博士に向つてなつかしげに話しかけたのであつた。

きこく
帰国

親子は、その後、バリ港を船で離れることができた。その船はノールウェイの汽船で、インドへ行くものだった。

コロンボで、船を下りなくてはならなかつた。そしてそこで、更に東へ向う便船を探し

あてることが必要だった。親子は、慣れない土地で、新しい苦勞を重ねた。

この二人を、ほんとの親子だと氣のつく者はなかった。そうであろう、治明博士の方は誰が見でも中年の東洋人であるのに対し、ロザレの肉体を借用している隆夫の方は、青い目玉がひどく落ちこみ、鼻は高くて山の背のように見え、その下にすぐ唇があつて、やせひからびた近東人だ。頭巾の下からは、鳶色の縮れ毛がもじやもじやとはみ出している。パンツの下からはみ出ている脛の細いことといったら、今にもほきんと折れそうだった。

しかし結局、隆夫のおかげで、治明博士はインドシナへ向う貨物船に便乗することができた。それはロザレの隆夫を聖者に仕立て、すこしものをいわせないことにし——しやべれば隆夫は日本語しか話せなかつた——治明博士はその忠実なる下僕として仕えているように見せかけ、そのキラマン号の下級船員の信用を得て、乗船が出来たのであつた。もつとも密航するのだから、親子は船艙の隅つこに窮屈な恰好をしていなければならなかつた。

キラマン号をハノイで下りた。

それからフランスの飛行機に乗つて上海へ飛んだ。そのとき親子は、小ざつぱりと

した背広に身を包んでいた。

上海から或る島を經由してひそかに九州の港についた。いよいよ日本へ帰りついたのである。バリ港を親子が離れてから八十二日目のことであつた。

「よくまあ、無事に帰つて来られたものだ」

「やつてみれば、機会をつかむ運にも出会うわけですね」

親子は、休むひまもなく自動車を雇つて、そこから山越えをして四十五キロ先にある大きな都市へ潜入した。汽車の便はあつたのであるが、それは避けた。

三日ほど身体を休ませたのち、いよいよ親子は東京へ向つた。

これからがたいへんであつた。親子の間には、ちゃんと打合わせがついているものの、果してそのとおりのうまく行くかどうか分らなかつた。もしどこかで尻尾をおさえられたが最後、えらいさわぎが起るにちがひなかつた。ことに隆夫は、むずかしい大芝居を演じおせなくてはならないのであつた。それもやむを得ない。おそるべき妖力を持つあの靈魂第十号をうち倒して、隆夫が損傷なく無事に元の肉体をとり戻すためには、どうしてもやり遂げなくてはならない仕事だつた。

親子は連れ立って、なつかしいわが家にはいった。それは日が暮れて間もなくのことだ

あつた。

隆夫の母は、おどろきとよろこびで、きぜつ気絶しそうになったくらいだ。しかしそれは、隆夫を自分のふところへとりもどした喜びではなくて、もはや亡なくなったものとあきらめていた夫の治明が、目の前に姿をあらわしたからであつた。

「まあ、わたし、夢を見ているのではないかしら……」

「夢ではないよ。ほら、わたしはこのとおりぴんぴんしている。苦勞を重ねて、やっと戻ってきたよ」

「ほんとですね。あなたは、ほんとに生きていらつしやる。ああ、なんとというありがたいことでしょう。神さまのお護まもりです」

「隆夫は、どうしているね」

治明博士は、かねて考えておいた段だん取とりのとおり、ここで重大なる質問を發した。

「ああ、隆夫……隆夫でございませうが……」

と、母親はまつ青になって、よろめいた。治明博士は、すばやく手を貸した。

「しつかりおしなさい。隆夫はどうかしたのですか」

「それが、あなた……」

「まさか隆夫は死にやすまいな」

治明博士の質問が、うしろの闇の中に立っている隆夫の胸にどきんとひびいた。もし死んでいたら、隆夫は再び自分の肉体を手に入れる機会を、永久に失うわけだ。母親は、どう応えるであろうか。

「死にはいたしませぬ」

母親の声は悲鳴に似ている。

しかしそれを聞いて隆夫は、ほつと胸をなでおろした。機会は今後に残されているのだ。それなれば、ミイラのような醜骸しゆうがいを借りて日本へ戻って来た甲斐はあるというものだ。

「……死にはいたしませぬが、少々不始末ふしまつがあるのでございます」

「不始末とは」

「ああ、こんなところで立ち話はなりません。さ、うちへおはいりになって……」

「待つて下さい。わしにはひとりの連れつがある。その方はわしの恩人です。わしをこうして無事にここまで送つて来て下さった大恩人なんだ。その方をうちへお泊め申さねばならない」

母親はおどろいた。治明博士の呼ぶ声に、隆夫は闇の中から姿をあらわし、なつかしい

母親の前に立った。

(ああ、いたわしい)

母親は、しばらく見ないうちに別人のようにやせ、頭髮には白いものが増していた。

「レザールさんとおっしゃる。日本語はお話しにならない。尊とうとい聖者でいらっしゃる。しかしお礼をのべなさい。レザールさんは聖者だから、お前のまごころはお分りになるはずである」

母親はおそれ入って、その場にくども頭をさげて、夫の危難を救ってくれたことを感謝した。

隆夫はよろこびと、おかしさと、もの足りなさの渦うずまき巻の中にあつて、ブーツとしてしまった。

その後の物語

昔ながらの親子三人水いらずの生活が復活した。だが、それは奇妙な生活だった。これが親子三人水いらずの生活だということは、治明博士と隆夫だけがわきまえていることで、母親ひとりには、その外におかれていた。世間のひとたちも、一いちはた畑さんのお家は、ご主人が帰ってこれられ、奥さんはおよろこびである。ご主人がインド人みたいなこわい顔のお客さんを引張ってこれられて、そのひとが、あれからずっと同居している——と、了りようかい解かいしていた。

隆夫は、めつたに主家おもやに顔を出さなかった。それは治明博士が隆夫のために、例の無電小屋すまいを居住宅すまいにあてるよう隆夫の母親にいつけたからである。そこに居るなら、隆夫は寝言ねごとを日本語でいってもよかつた。なにしろ、事件がうまい結けつ着ちやくをみせるまでは、母親をもあざむいておく必要があつたから、隆夫はなるべく主家へ顔出しをしないのがよかつたのである。隆夫には、たいへんつらい試練しれんだつた。

もう一人の隆夫は、どうしていたろう。隆夫の肉体を持った靈魂第十号は、今どうしているか。

母親は、そのてんまつを治明博士に次のように語つた。

「隆夫が、あなた、急に女遊びをするようになってしまいましたね。監督の役にあるわた

くしとしては、あなたに申しわけもありませんが。いくらわたくしが意見をして、さっぱりきかないんです。もつとも女遊びといつても悪い場所へ行つて札つきの商売女をどうこうするのではなく、隆夫のは、お友達の家のお嬢さんと出来てしまったわけ、下品でも不潔でもないんですけれど、やはり女遊びにちがいありません。まことに申しわけのないことになってしまいました。

そんなわけで、隆夫はわたくしと考えがあいませんで、今はこの家に居ないのでございます。早くいえば、家出をしてしまったんです。でも隆夫の居所はつきりしていません。

それは今お話した相手のお嬢さんのお家なんです。三木さんといひまして、隆夫と仲よしの健さんのお家なんです。相手のお嬢さんというのが、健さんの姉さんで名津子さんという方です。つまり同級生のお姉さまと恋愛関係に陥おちてしまったわけです。名津子さんは二十歳ですが、隆夫は十八歳なんです。相手の方が二つも年齢が上になってます。いいことだと思いません。どうして隆夫が、そんな軟派なんぱせいねん青年になってしまったのか、もちろんわたくしにも監督上ゆだんがあつたわけでごさいます。まさしく悪魔に魅みられたのにちがいありません。

二人が結びついたきつかけは、名津子さんの発病でございました。いいえ、名津子さん

は、それまではたいへん健康にめぐまれた方でしたが、あるとき急におかしくなっていましたね、健さんもたいへんな心配、それよりもお母さんはもつとたいへんなご心配で、名津子さんといっしょにおかしくなってしまうように見えました。それを聞いた隆夫は、自分が研究して作った器械を使って、名津子さんの病気をなおしてあげたいといつて、その器械を持って三木さんのお家へ出かけたのでございますよ。その日帰って来ての短い話に、『お母さん、どうやら病氣の原因の手がかりをつかんだようですよ。二三日うちに、きつとうまく解決してみせます』と隆夫が申しました。それから隆夫は、いつもの通り、電波小屋へはいったわけですが、隆夫がおかしくなつたとはつきり分つたのは、その翌朝のことでございました。

その朝、隆夫はいつもとはかわつて、たいへん機嫌がよく、そして大元気で——すこしそのふるまいが乱暴すぎるようにも思われたこともありましたが——とにかくすばらしい上機嫌で、『これから三木さんのところへ行つて、名津子さんの病気をなおします。病氣がなおつたらぼくは名津子さんと結婚します。ぼくはこの家よりも名津子さんの家の方が好きだから、あつちに住みます。では、行ってきます』と途方もないことを口走ると、わたくしが追いつがるのをふり切つて、家を出ていつてしまつたんです。それつきり、隆夫

はうちへ戻つて来なくなりました。そのときのことを思い出しますと、今も胸がずきずき痛んでなりません。

隆夫がおかしくなつたので、わたくしはおどろきと悲しみのあまり、病人のようになつて寝ついてしまつて、一步も歩けなくなりました。しかしわたくしよりも、もつとびつくりなすつて、当惑とうわくなすつたのは、名津子さんのお家の人々でした。とりわけお母さまの驚きは、お察し申しあげるだに、いたましいことでした。なにしろ、とつぜん隆夫が乗りこんでいつて、名津子さんに抱きつき、そして『ぼくは只今から名津子さんと結婚します。そしてぼくは名津子さんと、ここに住みます』と宣言したというではございませんか。いくら顔見知りの青年であつても、こんなあつかましいことをいつて、しかもそれを目の前で実行してみせる心臓つぷりには、お母さまが卒倒なすつたというのも無理ではありませぬ。

それ以来、隆夫はあのお家から離れないのです。誰から何といわれようと、隆夫はすこしも気にしていないらしく、にやにや笑うだけで言葉もかえさず、その代り、忠実な番犬のように名津子さんのそばから離れないのです。しかしふしぎなことに、名津子さんの病気は、ぴつたりと癒なおつてしまいました。前のようにちゃんとおとなしくなり、いうことも

へんではなくなりました。二人の仲は、たいへんいいのです。そのかわり、この事件のてんまつは世間にひろがり、すごい評判になりました。もちろん隆夫は、退校処分しよぶんにされました。でも隆夫は平気でいます。今の今も、わたくしは隆夫の気持が分らないで、悩んでいるのでございます」

隆夫の母親は目頭めがしらをおさえた。

公開実験の日

ある日、治明博士は、困った顔になって、電波小屋でんぱこやへはいつて来た。

レザール聖者——実は隆夫のたましいは、待ちかねていたという風に椅子から立上つてきて、父親を迎えた。

「困ったことになったよ、隆夫」

治明博士は、まゆをひそめて、すぐその話を始めた。

「どうしたのですか、お父さん」

「わしはお前を救うために、こうして日本へ帰って来たんだ。ところが、わしが帰って来たことが広く報道されたため、わしは今方々から講演をしてくれと責められて断るのよわっている」

「断れば、ぜひ講演しろとはいわないでしょう」

「それはそうだが、中にはどうにも断り切れないのがある。心霊学会しんれいがっかいのがそれだ。あそこからは洋行の費用ももらっている。それにお前のことがもう大した評判なんだ。いや、お前というよりも、聖者レザール氏をわしが連れて来たということが大評判なんだ。ぜひその講演会で、術をやってみせてくれとの頼みだ。これにはよわっちまった」

「それは困りましたね。ぼくには何の術も出来ませんしねえ」

親子はしばらく黙って下を向いていた。やがて治明博士がいいにくそうに口を開いた。「どうだろうなあ、心霊学会だけに出るといふことに譲歩じょうほして、一つ出してもらえないかしらん」

「出てくられて、ぼくに何をしろとおっしゃるのですか、お父さん」

隆夫のたましいはおどろいて問い返した。

「何もしくなくていいんだ。ただ、舞台に出て目を閉じてじっとしていてもらえばいい。何をいわれても、はじめからしまいまで黙っていてもらえばいいんだ。それならお前にもできるだろう」

「それならやれますが、しかしそれでは聴衆ちようしゆうが承知しないでしよう。ぼくばかりか、お父さんもひどい攻撃をうけるにきまつていますよ」

「うん。しかしそのところはうまくやるつもりだ。お父さんもやりたくないんだが、心霊学会ばかりは義理があつてね、どうにも断りきれないのだ。お前もがまんしておくれ」

こんなわけで、隆夫のたましいは、はじめて公開の席に出ることになった。彼は不安でならなかつた。が、「はじめからしまいまで黙つていればいいんだ」という父親との約束を頼みにした。

一畑治明博士の帰国第一声講演及び心霊実験会——という予告が、心霊学会の会員に行きわたり、会員たちを昂奮させた。新聞社でもこの治明博士の帰国第一声を重視して紙上に報道した。だから会場は当日、会員以外に多数の傍聴人が集り、五千人の座席が満員になつてしまつた。

治明博士の講演は「ヨーロッパに於ける心霊研究の近況」というので、博士が身を多難たなん

にさらして、各地をめぐり、心霊学者や行者ぎょうじやに会い、親しく見聞し、あるいは共に研究したところについて概略がいりやくをのべた。それによると、心霊の实在と、それが肉体の死後にも独立に存在すること、そして心霊と肉体とがいつしよになつてゐる、いわゆる生存中も霊魂と肉体との分離が可能であると信ぜられてゐるそうである。更に博士は、一步深く進んで心霊世界しんれいせかいのあらましについて紹介した。

聴衆は熱心に聴講した。会員たちはもちろんのこと、傍聴人たちも深く興味をおぼえたらしい、講演後の質問は整理に困るほど多かつた。しかし時間が限られてゐるので、それをあるところで打切つて、いよいよ聖者レザール氏をこの舞台へ招くことになつた。来会者一同は、嵐のような拍手をもつていよいよ始まる心霊実験に大関心を示した。

治明博士は、聖者を迎える前に、レザール氏の身柄みがらと業績ぎようせきについて述べた。これは実は博士のデタラメが交つていたが、一部分はアクチニオ四十五世の下に集つてゐる行者団のことを述べたので、かなり実感のある話として聴衆の胸にひびいた。

舞台には、このとき聖壇せいだんが設けられた。白い布で被おほい、うしろには衝立ついたてがおかれ、それには奇怪なる刺繡ししゅうえ絵がかけられた。これは治明博士があちらで手に入れたもので、多分イランあたりで作られたらしい豪華なものである。それからその前に、法王の椅子が

置かれた。

そのとき舞台の裏で、奇妙な調子の楽器が奏しはじめられた。東洋風の管楽器の集合のようであった。それは音色ねいろが高からず低からず、そしてしずかに続いてやむことがなく、聴きいつているうちにだんだん自分のたましいがぬけ出していくような不安さえ湧いて来るのであった。

いったん退場した治明博士が、再び舞台へ現われた。しずかな足取り、敬けい虔けんな面持で歩をはこんでいる。と、そのあとから聖者レザール氏の長身が現われた。僧そう正じ服ふくとアラビア人の服とをごっちゃにしたような寛衣かんいをひっかけ、頭部には白いきれをすつぽりかぶり、肅しゆく々しゆくと進んで、聖壇にのぼり、椅子に腰を下ろした。聴衆の間からは、溜ため息いきが聞えた。つづいて嵐のような拍手が起つたが、聖者はそれに答えるでもなく、席についたまま石のように動かず、目を閉じたまま、ただ、とび出た高い鼻を、かぶりものの布がかかるく叩いていた。どこからか風が舞台へ吹いて来るものと見える。

さて、いよいよこれより治明博士一世一代の大芝居が始まることになった。果してうまく行くかどうか、千番に一番のかねあいだ。

奇蹟起るきせき

もう度胸をきめている治明博士だった。彼はまず聴衆に向つて、これより聖者レザール氏をわずらわして心靈実験を行うとアナウンスし、

「但し、聖者のおつとめはかなり忙しく、こうしているうちにも多数の心靈の訪問を受けて一々応待おうたいしなければならぬので、只今すぐに実験をお願いして、即座にそれが諸君の前に行われるかどうか疑問である。聖者のおつとめの合間をつかむことができたなら、諸君は運よく実験を見ることが出来るわけだ。その点よく御了解ごりようかいを得たい」

と、巧みにことわりを述べて、伏線ふくせんとした。

「それでは、まず第一番として、聖者をお願いして、私の肉体と私の靈魂とを分離して頂くことにします」

博士はついに、こういつて、実験を始めたのである。これは実は、博士が修業によつて会得えいじくして来た術であつて、なにも聖者をわずらわさなくとも、博士ひとりで出来ることで

あつた。博士としては、これだけは確実に来会者をはつきりおどろかせることが出来る自信があり、これさえ成功するなら、あとの実験はたとえことごとく失敗に終わっても、もうし 申わけ 訳がつくと考えていた。

そこで博士は、うやうやしく壇だんの前にいつて礼拝をし、それから立上つた。博士の考えでは、それから聖者に後向きとなつて聴衆の方を向いて座し、それから肉体と心霊ふんりの分離じゆつ術に入るつもりだつた。

ところが、博士の思つてもいないことが、そのときに起つた。

というのは、壇だんじやう上の聖者レザールが、博士に向つて手を振りだしたのである。

「汝なんじは下がれ。あちらに下がれ」

レザールは舞台の下手を指した。

博士はおどろいた。隆夫がなにをいい出したやらと、びっくりした。しかも「汝なんじは下がれ」といったのはギリシア語だつたではないか。隆夫がギリシア語を知っているとは今まで思つたこともなかつた。

「お前は、だまつて、じつと黙っているがいいよ。あとにはわしがうまくやるから」

と、治明博士は近づいて、それをいおうとしたのだ。ところがどうしたわけか、博士は

声が出せなかった。そして全身がカツとなり、じめじめと汗がわき出でた。

「汝は、しずかに、見ているがよい」

レザールは重ねていった。

と、博士は何者かに両脇から抱えあげられたようになり、自分の心に反して、ふらふらと舞台を下手へ下がっていった。そしてそこにおいてあつた椅子の一つへ、腰を下ろしてしまった。

来会者席からは、しわぶき一つ聞えなかった。みんな緊張の絶頂にあつたのだ。誰もみな——治明博士だけは例外として——聖者レザールが厳粛な心霊実験を始めたのだと思つていたので。このとき、舞台裏で、例の奇妙な楽器が鳴りだした。恨むような、泣くような、腸の千切れるような哀調をおびた楽の音であつた。来会者の中には、首すじがぞつと寒くなり、思わず襟をかきあわす者もいた。

今や場内は異様な妖気に包まれてしまった。これが東京のまん中であるとは、どうしても考えられなかった。

そのとき、来会者がざわめいた。

階下の正面の席から、ぬつと立ち上つた青年がいた。その青年は、ふらふらと前に歩き

だしたのだ。近くの席の者は見た。その青年の目は閉じていたことを。

青年はまっすぐに歩きつづけたので、ついに舞台の下まで行きついた。そこで行きどまりとなったと思つたら、青年の身体がスーツと煙のようの上にのぼった。あれよあれよと見るうちに、青年は舞台の上に自分の足をつけていた。

来^{らい}会^{かい}者^{しゃ}席^{せき}は、ふたたび氷のような静けさに返つた。今見たふしぎな現象について、適確な解釈を持つひまもなく、次の奇蹟が待たれるのであつた。かの青年は、亡^{ぼうれい}霊^{れい}の如くすり足をして、聖者の席に近づきつあつた。

このときの治明博士の焦^{しょうそう}燥^{そう}と驚^{きょう}愕^{がく}とは、たとえるもののないほどはげしかった。彼は席から立つて、舞台のまん中へとんでいきかかった。だが、どういうわけか、彼の全身はしびれてしまつて、立つことができなかつた。そのうちに彼は、重大な発見に、卒^{そつと}倒^うしそうになつた。というのは、客席から夢遊病者のようにふらふらと舞台へあがつて来た青年こそ、隆夫にそっくりの人物だつたからだ。

「これはことによると、えらいさわぎをひき起すことになるぞ」

治明博士は青くなつて、舞台を見入つた。

隆夫に似た青年は、ついに聖者の前に棒^{ぼう}立^だちになつた。

すると聖者はやおら椅子から立上った。そして両手をしずかに肩のところまであげたかと思うと、りようがん 両眼をかツと見開いて、自分の前の青年をはったとにらみつけ、

「けけッけッけ」

と、鳥の啼なきていえ声のような声をたてた。

そのとき来会者たちは、聖壇の上に、無声むせいの火花のようなものがとんだように思ったということだ。が、それはそれとして、聖者ににらみつけられた青年は、大風おおかぜに吹きとばされたようにうしろへよろめいた。そしてやつと踏み止とどまったかと思うと、これまた奇妙な声をたて、そしてその場にぱったりと倒れてしまった。

奇蹟はまだつづいた。このとき聖者の身体から、絢爛けんらんたる着衣がするすると下に落ちた。と、聖者の肉体がむき出しに出た。が、それは黄いろく乾からびた貧弱ひんじやくきわまる身体であった。聖者の顔も一変して、猿の骸骨がいこつのようになっていた。聖者の身体はすーッと宙に浮いた。と見る間に、聖者の身体は瞬しゆんかん間金色に輝いた。が、その直後、聖者の身体は煙のように消え失せてしまった。

聖者の声

この奇怪なる出来事の間、場内は墓場のよう^{はかば}にしずまりかえっていた。

また、治明博士は、この間、目は見え、耳は聞えるが、ふしぎに声が出ず、五体は金し
ばりになったように、舞台の上の肘かけ椅子の上に密着して、動くことができなかつた。
ただ、その間に、博士は天の一角^{いっかく}からふしぎな声を聞いた。

「……汝の願いは、今やとげられた。汝の子の肉体から、呪^{のろ}われたる靈魂は追^{つい}放^{ほう}せられ、
汝の子の靈魂がそれにかわつて入り、すべて元のとおりになつた。これで汝は満足したは
ずである。さらば……」

その声！ その声こそ、聖者アクチニオ四十五世の声にちがひなかつた。

「ははあ。かたじけなし」

と治明博士は心の中に感謝を爆発させて、アクチニオ四十五世の名をたたえた。そのと
きに、高き空間を飛び行く聖者の姿が見えた。聖者は白い衣を長く引き、金色の光に包ま
れていた。その右側に、やせこけた色の黒い人物がつき従っていた。それは殉^{じゆんき}教^{きやう}者^{しや}

ロザレにまぎれもなかった。聖者アクチニオ四十五世の左手は、ふわふわとした絹わたのようなものを掴つかんでぶら下げていた。よく見ると、その絹わたのようなものの中には、二つの眼のようなものが、苦しうにぐるぐる動いていた。それこそ、永らく隆夫やその両親や友人たちにわずらいをあたえていた所謂いわゆる霊魂第十号にちがひなかった。

大会堂をゆるがすほどの大拍手が起った。そのさわぎに、治明博士は吾れにかえった。アクチニオ四十五世も、ロザレや霊魂第十号の幻影げんえいも、同時にかき消すように消え失せた。

大感激の拍手は、しばらく鳴りやまなかった。来会者の中には、拍手をしながら席を立つて舞台の下へ駈けだして来る者もあった。

治明博士は、呆然ぼうぜんとしていた。

この場の推移すいを見ていて、どうにもじつとしていられなくなった司会者が、楽屋からとび出して来て、治明博士の前に進んだ。またもや割れるような満場の拍手だった。

「先生。来会者たちは大感激しています。そして、姿を消した聖者レザールをもう一度聖台へ出してほしいと、熱心に申入れて来ます。どうしましょうか。とりあえず、先生はあの壇の前へ行つて、立つて下さいまし」

司会者は、早口ながら、半ばなか歎願たんがんし、半ば命令するように入った。

「私が万事ばんじ心得ています」

治明博士は、ようやく口を開いた。そしてよろよろと立上ると、舞台を歩いて、聖者レザールを座らせてあつた壇の方へ行つた。そこで博士は、当然のこととして、壇の前に倒れている若い男の身体に行きあつた。博士の靴の先が、その男の身体にふれると、その男はむくむくと起き上つた。そして博士の顔を凝視ぎやうしすると、

「おお、お父さん」

と叫んで、治明博士に抱きついた。

博士はふらふらとして倒れそうになつたが、やつと踏みこたえた。そして口の中で、アクチニオ四十五世の名をくりかえし、となえた。

「お父さん。ぼくは元の身体に帰ることができましたよ。よろこんで下さい」

「ほんとにお前は元の身体へ帰つて来たのか」

「ほんとですとも。よく見て下さい。何でも聞いてみて下さい」

「ほんとならしいね。アクチニオ四十五世にお前も感謝の祈りをささげなさい」

舞台の上で親子が抱きあつて、わめいたり涙を流しているの、来会者には何のことだ

かわけが分らなかつたが、やはり感動させられたものと見えて、またもや大拍手が起つた。治明博士は、その拍手を聞くと、身ぶるいして、正面に向き直つた。

「来会者の皆さま。私は本日、全く予期せざる心霊現象にぶつかりました。それは信じられないほど神秘であり、またおどろくべき明確なる現象であります。ここに並んで立っています者は、私の伴でありますが、この伴は永い間、自分の肉体を、あやしい靈魂に奪われて居りましたが、さつき皆さんが見ておいでになる前で、伴の靈魂は、元の肉体へ復歸したのであります。こう申しただけでは、何のことかお分りになりますまいが、これから詳しくお話しいたしましょう……」

とて、博士は改めて、隆夫に関する心霊事件の真相について、初めからの話を語り出したのである。

その夜の来会者は、十二分に満足を得て、散会していった。そして誰もが、心霊というものについて、もつともつと真剣に考え、そして本格的な実験を積みかさねていく必要があると痛感したことであつた。

隆夫のメモ

呼鈴よびりんが鳴ったので、玄関のしまりをはずして硝子戸ガラスを開いた隆夫の母親は、びつくりさせられた。意外にも、夫と隆夫とが、門灯の光を浴び、にこにこして肩を並べていたからだ。

治明博士は、靴をぬぎながら、さつそく、長いいきさつとその信すべき根拠について、夫人に語りはじめた。その話は、茶の間へ入って、博士の前におかれた湯呑ゆのみの中の茶が冷えるまでもつづいたが、隆夫の母親には、博士の話すことからの内容が、ちんぷんかんぷんで、さつぱり分からなかった。だが、母親は、今夜のめでたい出来事が分らないのではなかった。かわいい隆夫が、前の状態から抜けて、元の隆夫に戻っていることを、隆夫の話しぶりや目の動きで、すぐそれと悟った。隆夫が元のように戻ってくれば、それだけで十分であった。どうして隆夫が変わり、どうして隆夫が癒なおったか、そんな理屈りくつはどうでもよかつたのである。夜は更けていたが、親子三人水入らずの祝賀しゅくがの宴もよおがそれから催された。隆夫も、父親治明博士も、母親も、話すことが山のようにあった。そして時刻の移つ

ていくのが分らなかつた。

電話がかかつてきたので、母親は立つていった。そのとき柱時計が午前一時をうった。受話器をはずして返事をする、電話をかけて来たのは三木健みきけんであつた。

「もしもし。こつちは三木ですが、もしやそちらに、隆夫君が帰っていませんかしら」

「えッ、隆夫ですつて。あのウ、少々お待ち下さいまし」

治明博士がすばしこく電話の内容を感じて立つて来たので、母親ははっきりした返事をしないで、相手に待ってもらつた。替つて、治明博士が電話口に出た。

「隆夫は、こつちに来て居ません。だいぶん以前から、どこかへ行つてしまつて、うちには寄りつかんそうです。どうかしましたか」

と、知らない風を装よそおつた。これは意地悪いじわるではなく、自分そうしておくのが、双方のためになると思つたからだ。

三木健の、おどおどした声が、受話器の奥からひびいて来た。

「ぼくは、ほんとに困り切つています。とにかく隆夫君はずつとうちに泊つています。しかし今夜にかぎつて、まだ戻つて来ないので心配しています。もしや、そちらへ帰つたのではないかと思つたものですから、お電話したんです」

「なんだか事情はよくのみこめませんが、君のご心^{しんろう}労は深く察します。名津子さんは、
 そうですね。おたつしやですか」

「そのことも、ちよつと心配なんです。今夜姉は卒^{そつとう}倒しましてね、ぼくたちおどろきま
 した。それから姉は、昏^{こんこん}々と睡りつづけているのです。お医者さんも呼びましたが、手
 当をしても覚^{かくせい}醒しないのです。昼間は、たいへん元氣でしたがね」

それを聞くと、治明博士はどきりとした。

「卒倒されたというんですか。それは今夜の幾時ごろでしたか」

「姉が卒倒した時刻は、そうですね、たしか八時半ごろでした」

「今夜の八時半ごろ。なるほど」

「どうかしましたか」

「いや、どうもしません。とにかくそのまま静かに寝かしておいておあげになるがいいで
 しょう。四五日たてば、きつとよくなられるでしょう。多分、今までよりも、もっと元氣
 におなりでしょう」

電話を切つて、茶の間へ戻つていく博士は、

「八時半か。あの時刻にぴったり合うぞ」

と、ひとりごとをくりかえした。午後八時半といえ、隆夫がレザールの前で倒れた時刻だ。隆夫の肉体に宿っていた靈魂第十号が追い出され、そのあとへ隆夫の靈魂が仮りの宿レザールの身体をはなれて飛びこんだその時刻にぴつたりと一致する。あの出来ごとが、てきめんに名津子にひびいたとすれば、これは名津子の身の上にも一變化ひとへんか起るのではなからうかと、博士は推理した。

博士は、茶の間の自分の座に戻ってから、彼の考えを隆夫と、その母親に説明し、当分の間、隆夫は、この家に居ないことにしておいた方がよいと、結論を述べた。隆夫は、その夜ゆつくりと足を伸ばして睡った。

翌日からは、彼はなつかしい電波小屋にとじ籠こもった。そして多くの時間を、仮りのベッドの上で昼寝に費ついやし、ときどき起き出でては荒れたままになっている実験装置の部品や結線を整理した。その間に、彼はこれまでの事件についてのメモを書き綴つづった。

そのメモの中から、少しばかり抜いておこう。

——自分ノ感ジデハ、此ノ空間ヲ往来シテイル電波ノ諸相ニツイテノ研究ハ、ホンノ手ガツイタバカリダト思ウ。ワレワレ通信技術者ガワレワレノ組立テタ器械ニヨツテ放出シテイル通信用電波ノ外ニ此ノ空間ニハ現ニ多種多様ナ未知ノ電波ガ飛ビ交まじツテイルノ

ダ。ソレヲ探求シツクスコトハ容易デナイト思ウガ、ゼヒトモ速カニソノ研究ニ着手スベキダ。

カカル未知電波ノウチノアルモノハ、時ニ雑音トイウ名ノモトニワレワレニ知ラレテイル。シカシ果シテソレガ雑音ナドトイワレル二十分ナ層電波ダトスルコトハ早計ニ過ギルト思ワレル。雑音コソハ、直チニ研究ニ取懸ルニ適シタ未知電波ダ。コレヲ探求シ、分析シ、整頓シ、再現スルコトニヨツテ、ワレワレハ自然界ノ新シキ神秘ニ触レルコトガ出来ルノデハナイカト思ウ。

自分ガ關係シタ靈魂第十号モ、カカル雑音ノ中カラ姿ヲ現ワシタノデアル。第十号ハ頗ル野心ニ燃エタ靈魂ダツタ。第十号ハ人間界ニ肉迫シ、ソシテ遂ニ人間ノ靈魂ヲ捉エルニ至ツタ。ソノ扱バラタル靈魂ノ持主ハ、不運デモアツタガ、又、捉エラレルニ適シタホドノ脆弱性ト不安定トヲ持ツテイタ氣ノ毒ナ人デアツタ。ソウイウ種類ノ人間ハ、案外身边ニ少ナクナイノデアル。深い注意ヲモツテカカル人間ニ対シ適當ナ電波的保護ヲ急グノデナケレバ、世ノ中ニハ「手ニオエナイ神經病者」トイワレルモノガ年ト共ニ激増スルデアロウ。

自分ハ健康ヲ回復シタラ、此ノ方面ノ研究ニ没頭シヨウト思ウ。ソシテ、可能ナラバ

靈魂第十号ニモウ一度会イ、彼及び彼ノ背後ニアル心靈科学ト握手シ、同ジ目的ニ向ツ
テ協力シタイモノダ。(以下略)

治明博士の予想した如く、一週間後に名津子はすっかり元気になり、それまでの妖しき
態度も消え、元の名津子に戻った。そして隆夫や健けんや二宮にのみやや四方よっかたの交際も旧もとに復した。
なお、隆夫は改めて名津子と結婚した。隆夫の方が年下であることは、二人の間にも親
たちの間にも、もはや問題でなかつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

底本の親本：「海野十三全集 第七巻」東光出版社

1951（昭和26）年5月5日

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年11月12日公開

2006年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

靈魂第十号の秘密

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>